

2-5.郷土食の八丁味噌造りにみる歴史的風致

(1)はじめに

八丁味噌は、17世紀の江戸時代初期から、旧東海道を挟んで立地する2軒の老舗が300年以上続く昔ながらの伝統製法により製造する豆味噌¹で、現在に至るまで岡崎を代表する地場産業及び名産として全国的にも名高い。両家は「カクキュー²」、「まるや³」の屋号で現在も八丁味噌の製造を続けており、八町^{はっちょう}村(現八丁町)に立地したことから、「八丁味噌」という名がついたとされる。

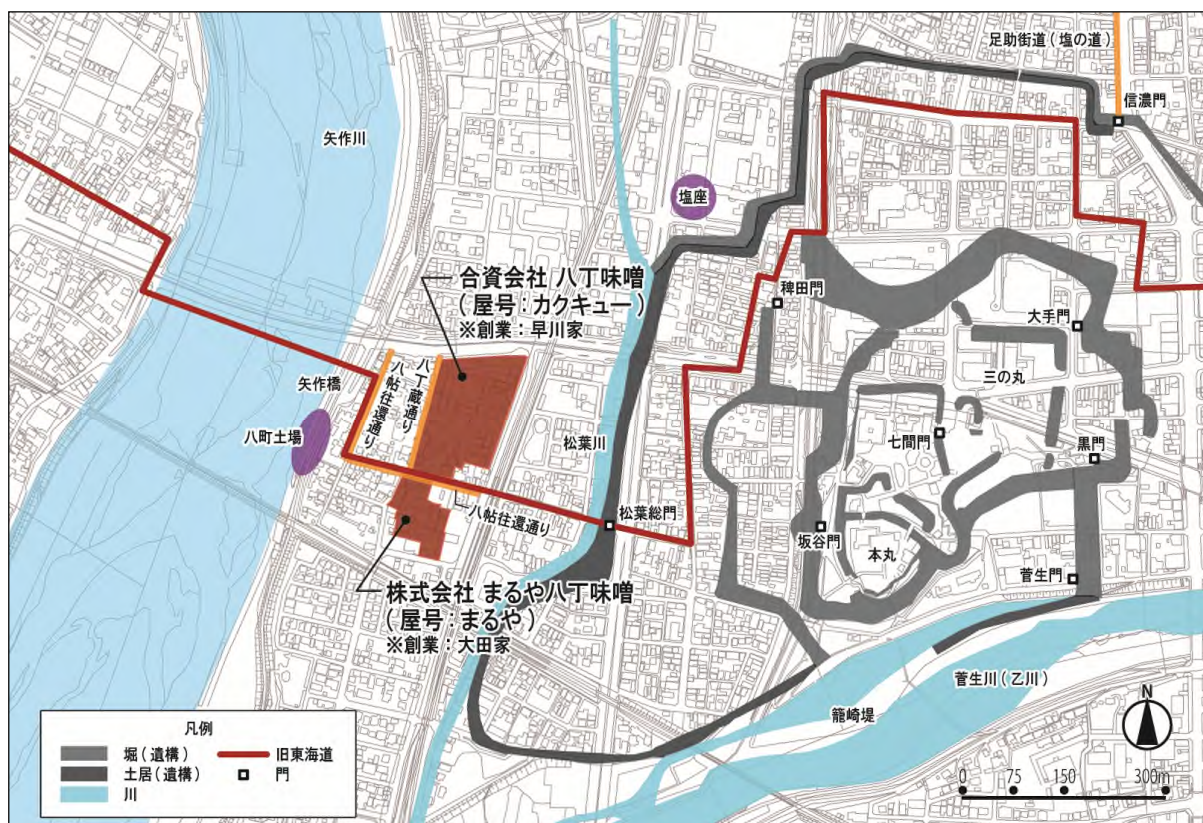


図2-5-1 八丁味噌2軒の位置(江戸時代後期の絵図を現在の地図に重ねたもの)

(2)八丁味噌の製造

八丁味噌がこの地で産業として発展したのは、原料の調達、醸造の環境、製品の運搬の面で、味噌造りにとって最適な場所であったことが大きい。この地は、南北の矢作川^{やはぎがわ}の舟運と東西の



図2-5-2 矢作川の舟運(大正時代)

¹ 大豆を原料にした豆麹を使用して作る味噌

² 合資会社 八丁味噌(創業：早川家)

³ 株式会社 まるや八丁味噌(創業：大田家)

旧東海道が交わる水陸交通の要衝であり、江戸時代には矢作川に土場(船着場)、岡崎宿に塩座(塩の専売)が置かれたことから、原料となる大豆や塩を入手しやすく、さらに矢作川の伏流水という良質な湧水や温暖な気候風土など、味噌造りにとって三拍子揃った立地条件であった。

大豆の仕入れ

八丁味噌の主たる原料である大豆を、いかに適正な品質と価格で大量に入手するかが重要であった。

早川家の「大豆買帳」に記載された主な仕入れ先・仕入れ量によると、地元から仕入れた大豆は、盆大豆(古盆・新盆)と総称されており、また仕入れ先の場所名から、地元大豆(矢作大豆)、吉田⁴大豆、知多大豆等とも呼ばれていた。他国より仕入れたものは、関東では上州大豆、武州大豆、東北では仙台大豆、越後大豆、宮古品などがあり、特に港名で大豆名を記載しているものがあることから、舟運との関係がうかがえる。

大豆の仕入れは7月から11月までが大半で、関東・東北方面がその6割以上を占め、地元の割合は低かった。地元大豆が少ないのは、周辺から人馬で少しずつ運ぶよりも、遠方で大量に生産される良質な大豆を、海運の進展、特に江戸廻船⁵の発達により、大量に入手できたこと、また三河木綿⁶や味噌製品等を運搬する帰り荷として、安く入手できたことが大きな要因である。関東・東北方面からの仕入れ大豆は、江戸・大坂を経由する廻船によって海上輸送され、三河湾の矢作川口で川舟に積み換えされ、八町土場で荷揚された。

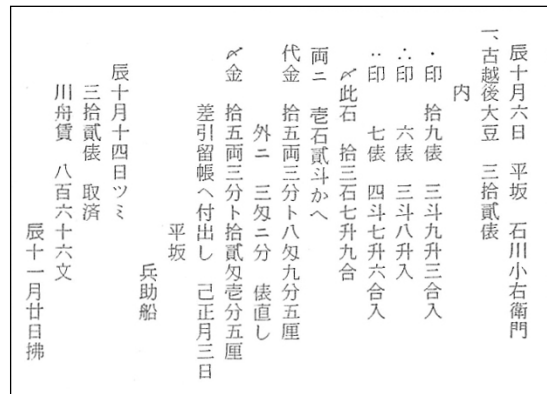


図2-5-3 早川家「大豆買帳」(寛政8年(1796))

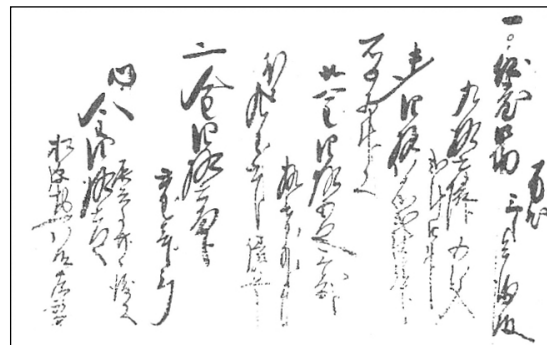


図2-5-4 早川家「大豆買帳」(天保15年(1844))

年代	関東	東北	九州	西三・知多	東三	その他
天明7	55%	37%	3%			
〃 8	52	13		10%	10%	
寛政元	76	10		15		
〃 2	67	26				7%(越後) 20(浜)
享和元	63		6	12	20	
〃 2	16	60				
〃 3	90		10			
文化元	20	34			40	
〃 2	53		4		31	5(浜)6.5(大津)
〃 3	9	53	19		13	
天保15		31		58		
弘化2	15	6	7.5	54	3	6.5(知多)
〃 3	14	35.5		38		
〃 4	58	42				
嘉永元	61	11.6		27.5		
〃 2		35		37.4		

図2-5-5 早川家「地区別年代別仕入れ量の割合」

⁴ 旧幡豆郡吉田町。現西尾市。

⁵ 江戸時代において、江戸・大坂間の港で運行された貨物船のこと。

⁶ 三河は全国有数の木綿の産地として江戸にも多く流通した。

塩の仕入れ

塩も八丁味噌造りにおいて重要な原料であり、生活必需品でもあったが、江戸時代には塩座による専売が行われており、その統制下に置かれていた。

早川家で仕入れていた塩は、「饗庭塩」といい、鉄釜によるニガリが少なく、粒が細かい上質の真塩で、味噌醸造に適していたため、矢作古川河口付近(現西尾市)

にあった大岡屋鈴木健治から仕入れ、その他若干量を特定の岡崎城下・田町塩問屋から購入していた。一方、大田家も同じく「饗庭塩」を吉田村(現西尾市吉良町)の塩問屋より仕入れていた。

塩の仕入れは、三河湾沿岸部の製塩地から舟運で矢作川を上り、塩座を通して行われていたが、明治元年(1868)の幕府崩壊とともに塩座の特権が喪失し、運上も徴収されなくなった。

岡崎の塩座

天正年間(1573~1592)に織田信長旧臣の国分家が尾張熱田より八町村に移り、松平氏の軍事物資を扱う商人となり、塩屋を営んだことに始まる。慶長12年(1607)の矢作川の洪水によってこの地が大きな被害を受けたため伝馬町に移り、同じく洪水から町を救済するため塩の商売を願い出た田町とともに慶長14年(1609)に許可された。塩座を経た塩は、馬の背に積み替え足助まで運ばれたことから足助街道⁷は塩の道ともいわれる。

八丁味噌の醸造

江戸時代から続く伝統製法を守り継ぎ、原料は大豆と塩のみである。まず蒸した大豆に麴カビをつけて豆麴にし、この豆麴に塩と水を加えて、100年以上使用しているものもある大きな杉桶に仕込んでいく。そして職人の手により天然の川石を山のように一つ一つ積み上げて重石とし、当地の自然環境に任せ、こだわりの天然醸造で二夏二冬の間じっくりと熟成させる。この



図2-5-7 石積み

重石を木桶全体に均等に圧力が加わるように、かつ地震があっても崩れないようにする熟練

	買った塩依数	うち大岡屋の買った塩依	塩相場(兩二)	運賃(1俵ニ付)	賃小たちん(1俵ニ付)	川揚口(1俵ニ付)	口(100俵ニ付)	銭升(100俵ニ付)	銭御上(100俵ニ付)	運上(100俵ニ付)
嘉永4(1851)	1100	1100	19.5	16.6	4.3	5.4	11.0	2.0	9.0	
6(1853)	1000	1000	25.5	16.6	4.34	4.4	6.97	2.0	9.45	
安政3(1856)	1259	1150	24.0	16.6	4.24	4.39	8.41	2.43	9.5	
文久2(1862)	1852	1500	19.0	16.53	3.94	4.48	12.59	2.0	9.45	
3(1863)	1360	1360	13.0	16.92	4.66	4.65	17.22	2.0	9.12	
元治元(1864)	1000	1000	8.0	19.83	4.99	4.58	85.0	2.0	9.4	
慶応元(1865)	725	725	8.0	24.98	5.25	5.33	24.65	2.0	9.52	
2(1866)	750	750	6.5	33.33	6.66	6.89	35.4	2.0	9.0	
3(1867)	850	850	9.5	67.36	14.60	10.51	22.0	1.82	9.45	
明治元(1868)	685	685	6.5	88.00	15.34	16.39	26.94	3.0	9.44	
2(1869)	593	593	3.2	102.35			74.74	3.0		
3(1870)	950	950	4.3	124.72	14.59		48.17	3.0		
4(1871)	1220	1220	5.0	137.60	16.76		38.86	3.0		
5(1872)	690	500	9.2		14.61		16.16	3.0		
6(1878)	936	880	8.5		14.00		22.47	3.0		

図2-5-6 早川家「塩買帳」の整理表

⁷ 岡崎城の外堀にあった信濃門を起点に足助に通じる街道。延長が7里(約28キロメートル)あることから、別名「七里街道」とも呼ばれる。

の域に達するには、少なくとも10年の経験が必要といわれている。

一般的な味噌は、コストを下げるため気温の低い季節でも味噌を加熱することで熟成を早める即醸法という方法をとるが、どうしても風味が単純となり四季の変化を経た天然醸造には及ばない。八丁味噌では二夏二冬の醸造期間の間、人の手は一切入らず、自然の摂理に従いじっくり寝かせるため、大豆の旨みを逃さず、硬くて色が濃い、そして少々の酸味と渋味がありながらも濃厚な旨みとコクのある独特の風味が特徴の八丁味噌ができる。

八丁味噌の販売

大豆そのものを麴化し塩と水だけを加えて熟成させる八丁味噌は、一般の味噌に比べて水分が少ないことから保存性が良く、携帯するのに便利であったため、戦国時代には三河武士の兵糧として重用されていた。その後、徳川家康公の関東移封を機に、三河譜代⁸の大名や旗本、そして参勤交代やお伊勢参りといった旧東海道を行き交う人々を通じて、広く全国に知られ、多くの人々に親しまれるようになった。

江戸時代以来、八町村の旧東海道を挟んで向かい合った早川家と大田家の2軒が製造販売する八丁味噌は特に有名となり、地元周辺のみならず江戸にも多く積み出され、その名を高からしめた。

両家の家伝によれば、味噌造りの始まりは戦国期又は室町時代初期まで遡るといわれるが、問屋として製造販売を行うようになったのは史料によると元禄期(1688～1704)頃からである。

早川家の「江戸当座帳」から販売先や販売量を整理してみると、販売先の問屋は、1年間で20軒程度で、そのうちの8～9軒は江戸であり、日本橋・大伝馬・麹町・牛込等の大店へ、伊勢では津・白子・松坂・四日市等の問屋を中心に販売されていることがわかる。



図2-5-8 仕込み(踏み)



図2-5-9 旧東海道(八帖往還通り)

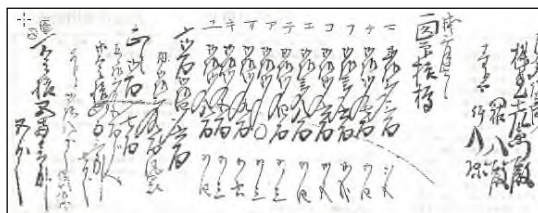


図2-5-10 早川家「江戸当座帳」の記載例

⁸ 家康公が三河に在城していた時代に服属した家臣のこと。

問屋名	文久2 (1862)	文久3 (1863)	元治元 (1864)	慶応元 (1865)	*慶応2 (1866)
	貫	貫	貫	貫	貫
江戸日本橋 伊勢屋吉之助	6328.3 (45.2%)	7418.8 (60.1%)	7050.0 (64.8%)	8192.3 (63.5%)	2270.4(65.8%)
江戸 麴町 三河屋治郎八	947.4 (6.8%)	940.5 (7.6%)	393.3 (3.6%)	488.0 (3.8%)	155.8(4.5%)
江戸牛込津久戸 三河屋吉兵衛	294.3 (2.1%)	233.7 (1.9%)	252.1 (2.3%)	308.0 (2.4%)	114.4(3.3%)
江戸下谷稲荷町 三河屋茂八	984.2 (7.0%)	942.2 (7.6%)	392.1 (3.6%)	1002.6 (7.8%)	315.9(9.1%)
江戸牛込小日向 三河屋又兵衛	655.4 (4.7%)	405.0 (3.3%)	291.7 (2.7%)	345.6 (2.7%)	/
江戸大伝馬町 川喜田半七	580.5 (4.1%)	410.7 (3.3%)	576.7 (5.3%)	/	/
江戸大伝馬町 川喜田清助	397.1 (2.8%)	199.2 (1.6%)	194.0 (1.7%)	195.3 (1.5%)	/
江戸大伝馬町 栴屋七左衛門	396.4 (2.8%)	394.7 (3.2%)	198.1 (1.8%)	398.1 (3.1%)	/
伊勢 四日市 西村 長八	/	4.9	24.0	170.4 (1.3%)	/
伊勢 白子 川喜田藤兵衛	5.0	4.7	9.5	/	/
伊勢 白子 青木 佐七	/	4.4	/	4.8	/
伊勢 津 神納屋長三郎	5.0	358.9 (2.9%)	9.4	/	/
伊勢 松阪 小野屋伊右衛門	/	117.1 (1.0%)	6.0	56.1	358.7(10.4%)
長谷川和七・与七	411.3 (2.9%)	119.7 (1.0%)	388.8 (3.6%)	163.0 (1.3%)	/
長谷川文兵衛	118.1 (0.8%)	456.3 (3.7%)	681.3 (6.3%)	100.4 (0.8%)	/
平坂 外山(柳助・徳太郎)	205.6 (1.5%)	43.8	43.0	504.8 (3.9%)	43.5

図2-5-11 早川家「江戸当座帳」の年代別・問屋別の味噌販売量(*印は4月まで)

安政4年(1857)に江戸役人が書いた「三河みやげ」という本の中には「八丁味噌」の記載があり、江戸時代以来、岡崎城下の名産として称賛されてきた。さらに安政2年(1855)頃に大樹寺再建のため江戸から派遣された役人の記録には、「味噌八丁味噌とて名物也、百文は三百三十匁又三百五十匁目位也、八丁村に問屋二軒あり」とあるなど、幕末には八丁味噌の名はかなり広い範囲に知られていたことがうかがえる。そして「今日も亦雨かとひとりごちながら 三河味噌あぶりて喰ふも」という斎藤茂吉⁹の短歌にも詠われた。

また、言うに及ばず、八丁味噌の生産地として地元でも多く販売され、古くから東海圏の食文化を支えてきた。岡崎城下及び岡崎領外への地元販売については「地廻当座帳」に記載されており、その販売圏は岡崎城下やその周辺を主として、知多・渥美・名古屋・美濃、そして信州伊那谷までに及び、領内寺院や藩庁、旗本、役所、番所、茶屋役人など小口購入も多い。

岡崎城下町と周辺の販売先
米屋市蔵(山中) 願照寺(軸越) 新助(町内) 法蔵寺(本宿) 緒方(城内) 早川(隣家) 定治郎(藤川) 綿屋(百々) 今井(百々) 八三郎(村入用) 足袋屋(本町) 長坂(細川) 平川(町内) 鶴屋(連尺) 羽田(両町) 御陣屋(本郷) 新実(西穴作) 手永会所(渡) 畔柳(連尺) 大嶋屋(連尺) 中野(城内代官所) 大樹寺(鴨田) 穀屋(久右エ門) 平野(中嶋) 本屋文七(連尺) 穀屋(投町) 服部(伝馬町) 紙屋(連尺) 垣内(御家中) 具津(百々) ④(六地蔵) 羽田(両町) 松応寺(能見) 広瀬(城内) 酒屋(祐金) 成瀬(連尺) 上様御勝手(城内) 茶屋役人(板屋) 御陣屋(西本郷) 植村(城内) 太田(北野) 中野屋(伝馬) 津嶋屋(能見) 貝津屋(百々) 御膳所(城内) 小村屋(上伝馬) 志賀(城内) 足立(中嶋) 古手屋(連尺) 奥村(城内) 御番所(伝馬) 玉泉寺(大友) 千賀(連尺) 林(城内) 御役所(城内) 深見藤十(新堀) 鈴木(伝馬) 回向院(鴨田) 中根(細川) 御宿(伊賀)
岡崎領外の販売先
福嶋屋(挙母) 村木屋(古鼠) 油屋七兵衛(新川) 小林屋(濃州) 豆腐屋(九久平) 宇野(平藪) 溜屋(城ヶ入) 米屋(桑名) 新実(平坂) 西尾屋 吉左エ門(挙母) 橋本屋(大須) 白木屋(挙母) 米屋(平坂) 中屋(越戸) 塩屋吉右エ門(大浜) 山形屋(越戸) 太田(川島) 万座(名古屋) 土方(七浜) 松平(赤坂) 問屋源之助(古鼠) 御陣屋(深溝) 機屋嘉右エ門(牛田) 畔柳親方(棚尾) 藤田(宮) 片山(鷲塚) 武右エ門(茶屋村) 尾張屋(知継鮒) 市川(平坂) 佐藤(名古屋) 渡辺(濃州芝原) 吉嶋(名古屋) 野村(田原) 現金屋(岩村) 結梗屋(名古屋) 大和屋(名古屋) 渡辺(濃州・芝北方) 徳次郎(亀崎) 穂積屋(亀崎) 間瀬(亀崎) 白木屋(田原) 長谷川(岩村) 赤重(越戸) 代三郎(佐久嶋) 栗田(滝山) 八百屋(名古屋長者町) 油屋(挙母) 彦左エ門(平藪) 麻屋(吉田) 伊助(浪合) 市古(伏見屋新田) 山川(江州) 関東屋(京都) 吉田(亀崎) 稲垣(中畑) 天野(京都) 海口屋(京都) 御宿喜太郎(伊賀) 田中屋(大坂) 加賀屋(大坂) 善永寺(京都) 万屋(津) 国察(京都) 正観寺(京都) 米屋(桑名) 大和屋(名古屋・堀川) 渡船方会所(名古屋) 松居(伊勢)
地元問屋による江戸への販売
三上宗左エ門(江戸) 御山門(芝) 大納戸(江戸) 大和屋(日本橋) 浅見(江戸御屋敷) 三河屋(浅草) 小津清左エ門(大伝馬) 関戸(元浜) 和泉屋(大伝馬) 堺屋(西久保) 木戸(江戸御屋敷) 内田屋(元浜) 宮部(下谷) 近江屋(新大坂町) 太田屋(深川) 田原屋(本村木)

図2-5-12 早川家「地廻当座帳」による地元の販売先(慶応2年(1866)) ()内は販売先地名

⁹ 明治から昭和にかけての歌人、精神科医。

味噌造りの伝統はその後も代々受け継がれ、カクキューでは明治25年(1892)に宮内省への納品が始まり、同34年(1901)には正式に御用達の栄に浴することになった。そして日清戦争での広島大本営への製品納入や病院、有名料理店、菓子屋での使用など販路が拡大し、第二次世界大戦後も八丁味噌の銘柄の声望は衰えず、マナスル¹⁰登山隊や南極観測隊の携行食品に採用されるなど注目されてきた。

さらに現在では、両社とも味噌蔵等の工場見学を設けており、販売だけでなく伝統産業を実際に見て味わうことのできる貴重な場として今日まで多くの観光客を受け入れ、本市の観光振興においても欠かせない産業となっている。

月	日	江戸の問屋名	日	岡崎以西の問屋名	日	地元の販売先
1	17	大伝馬 万屋平三郎(4) 中屋 吉助(5) 長谷川丈助(3) 日本橋呉服町 伊勢屋吉之助(5)		名古屋玉屋 麩屋萬兵衛(1) 本町 こまや源兵衛(棚屋 磯七舟)		新堀 深見佐兵衛(2)
2	5	日本橋 伊勢屋吉之助(5) 白子屋紀兵衛(3)			1	中村 中基(1) <平古 清作舟>
	11	大伝馬 大和屋善吉(3) <大浜 長七舟>			5	味浜 普元寺(1)
	17	日本橋 伊勢屋吉之助(5) <中畑 大吉舟>			5	平坂 外山六右エ門(1) <中畑 清吉舟>
	24	大伝馬 伊藤作兵衛(5) <中畑 仁平舟>				
3	4	〃 伊藤利助 <六供 伊藤屋>	2	鳴海 山花文吉(2)	11	中村 中根甚助(1) <平蔵 金吾舟>
	12	日本橋 伊勢吉(5) <大浜 長四郎舟>			19	中村 中根甚助(1) <中畑 善吉舟>
	21	白子屋仁兵衛(3) <中畑 善吉舟>				
	31	水野和泉守屋敷丸尾(4) <中畑 勘藏舟>				
4	1	水野和泉守屋敷大石(4) <中畑 勘藏舟>	24	伝馬町1 鈴村庄兵衛(1)	16	平坂 石川小左エ門(1) <中畑 勘藏舟>
	16	日本橋 伊勢屋(5) <棚屋 長四郎舟>			22	九久 伊 八(1) <平古 清吉舟>
	18	〃 〃 (5) < 〃 >				
5	1	小畑町 伊勢屋伝右エ門(5) <中畑 友吉舟>	22	鳴海 山花文吉(2)	6	中村 中根甚助(1) <中畑 要太郎舟>
	22	水野和泉守屋敷大石(3) <中畑 友吉舟>				
	〃	上野(1) <中畑 仁平舟>				
	〃	大伝馬 田端屋武兵衛(3) < 〃 >				
	〃	日本橋 伊勢屋(5) < 〃 >				
6	9	日本橋 伊勢吉(5) <中畑 仁平舟>			1	中村 中根甚助(1) <平古 清吉舟>
	〃	白子屋仁兵衛(5) <中畑 仁平舟>			6	米屋幸四郎(2)
	17	大伝馬 田端屋武兵衛(3)			6	土呂町 成瀬林右エ門(3)
	〃				18	福岡屋幸助(2)
7	26	日本橋 伊勢吉(5) <中畑 茂助舟>			12	中村 中根甚助(1) <平古 清吉舟>
	〃	大伝馬 田端屋(4) < 〃 >			26	中村 中根甚助(1) <平坂 惣八舟>
	〃	大 善(3) < 〃 >				
	〃	伊勢八(3) < 〃 >				
8	16	水野和泉守屋敷松本(2) <中畑 七舟>	11	熱田 白子屋(2) 鳴海 山花文吉(2)		
9	20	日本橋 伊勢屋(4) <中畑 勘七舟>	3	名古屋 次郎左エ門(2) <堤 茂兵衛舟>	8	中村 中根甚助(1) <平坂 惣八舟>
	〃	白子屋仁兵衛(3) < 〃 >	20	大坂 大坂屋小三郎(5) <中畑 仁平舟>	9	新堀 深見佐兵衛(5) <中畑 仁平舟>
	〃	大伝馬 紙屋七右エ門(5) < 〃 >	20	京都 岡田小八郎(5) < 〃 >		
10	5	大伝馬 長谷川丈助(3)	4	鳴海 児玉代助(1) <六供 伊藤屋>	10	中村 中根甚助(1) <平古 清吉舟>
	5	牛込 木村休逸(1) <中畑 又八舟>	9	名古屋 麩屋万兵衛(1) <中畑 又八舟>		
	20	日本橋 伊勢屋吉之助(5) <中畑 太郎吉エ門舟>	熱田 小沢屋市兵衛(2) <知立 源内馬>			
	〃	白子屋仁兵衛(3) < 〃 >	14	魚問屋沢右エ門(2) <堤 新吉馬>		
	〃	大伝馬 万屋平三郎(3) < 〃 >	19	桑谷 鍵屋喜藏(1) <中畑 又七舟>		
	〃	赤坂 藤訪隼人屋敷(1) < 〃 >	20	鳴海 山花文吉(2) <知立 神七馬>		
11	8	日本橋 伊勢屋吉之助(10) <渡場 清七舟>	14	名古屋伝馬 山屋次右エ門(1) <中畑 又七舟>	7	中村 中根甚助(1) <平坂 惣八舟>
	19	八丁畑 山川百太郎(3) < 〃 >	15	〃 納屋 近江屋藤左エ門(1) < 〃 >	21	平坂 七福九郎六(注文6) <渡場 清七舟>
	〃	水野和泉守屋敷大石(3) < 〃 >	13	大坂 嶋屋佐右エ門(1) <渡場 清七舟>	24	中村 中根甚助(1) <平古 甚助舟>
	26	日本橋 伊勢屋吉之助(5) <中畑 仁平舟>	13	京都 山端屋弥助(1) < 〃 >	22	新堀 深見佐兵衛(7) <中畑 仁平舟>
	〃	国 紀(3) < 〃 >	12	大坂 葉守屋新右エ門(2) < 〃 >	27	中村 中根甚助(1) <平古 清吉舟>
	〃	大伝馬 中屋吉助(5) < 〃 >	12	京都 小川徳右エ門(2) < 〃 >		
	〃	大和屋善吉(2) < 〃 >	28	名古屋 福岡屋幸助(1) <中畑 又七舟>		
	〃	萬 平(3) < 〃 >	〃 岩田屋源兵衛(1) < 〃 >			
	25	水野和泉守屋敷丸尾(6) <中畑 又八舟>				
12	10	日本橋 白子屋仁兵衛(3) <中畑 清九郎舟>	8	名古屋 駒屋源兵衛(2)	9	平坂 石川小左エ門(2) <中畑 久藏舟>
	〃	大伝馬 大和屋善吉(3) < 〃 >	5	伊勢津 平田新左エ門(1) <中畑 米藏舟>	9	中村 中根甚助(2) <平古 清吉舟>
	〃	田端屋半兵衛(3) < 〃 >	〃 白子 嶋村甚九郎(1) < 〃 >			
	〃	〃 平三郎(3) < 〃 >	21	名古屋 麩屋万兵衛(1) <中畑 三郎兵衛舟>		
	〃		22	熱田 小沢屋市兵衛(2) <知立 徳藏馬>		

図2-5-13 早川家「注文覚」による問屋名(天保8年(1837)) ()は樽数、 は運送川船名

¹⁰ ヒマラヤ山脈に属する標高世界8位のネパールの山。

(3)関連する建造物

カクキュー建造物配置図



図2-5-14 カクキュー建物配置

味噌造りが行われている敷地内には、その活動の舞台となってきた歴史的な建造物がいくつもある。カクキューの本社事務所は、昭和2年(1927)に建築され、南北2棟が中庭と土間を挟み接続し、現在も本社として使われている。ともに2階の外観は西欧のバシリカ¹¹式教会堂風の構成となっており、柱の白い部分と壁面の濃茶色とを対照させた意匠が特徴的である。内部は洋風の意匠でまとめられており、この建築の型は、当時わが国で行われていた古建築模倣様式の一例である。



図2-5-15 カクキュー本社事務所

¹¹ 建築の平面形式のひとつで、中央の身廊の2辺ないしはそれ以上の辺を、側廊によって取り囲むものをいう。

カクキューの本社蔵(史料館)は、明治40年(1907)に建築され、大規模な総二階の土蔵建築で、昭和40年代中頃まで味噌仕込み用の蔵として使用されていた。石垣の基段上は黒塗りの板張り壁面とし、二層目は白漆喰塗りである。蔵のすぐ近くを矢作川が流れているため、水害に備え花崗岩の石垣を高く積み上げたその上に蔵が造られており、壁面に開けられた格子窓の連続するさまが特徴的である。平成3年(1991)には、伝統の味噌造りが一目でわかる史料館として改修し、人形を使って仕込みや大豆を蒸す様子を再現するほか、宮内省御用達、岡崎藩との関係、八丁味噌の優れた品質を表す賞状や記録など、貴重な史料を展示し、その歴史や文化を内外に伝えている。



図2-5-16 カクキュー本社蔵(史料館)



図2-5-17 カクキュー本社蔵(史料館)

これら2棟は、平成8年(1996)に愛知県で最初の国登録文化財に登録された建造物であり、その外観は重要な景観資産となっている。

また、特に八丁蔵通りは、新甲子蔵から本蔵まで、明治・大正・昭和初期の年代の蔵が連なっており、花崗岩の石垣、味噌製造業者の信仰厚い光円寺の白壁、そして味噌蔵群の統一感ある黒壁のコントラストが約180メートルに渡って特徴的な景観を構成しており、ほのかに漂う味噌の香りに、今も続く伝統的な地場産業の風情を味わうことができる。

図2-5-18 新甲子蔵
(昭和14年(1939)建築)図2-5-19 甲子蔵
(大正13年(1924)建築)

図2-5-20 門扉

図2-5-21 大黒蔵
(明治7年(1874)建築)図2-5-22 乾蔵
(明治7年(1874)建築)図2-5-23 米蔵
(明治7年(1874)建築)



図2-5-24 本蔵
(明治12年(1879)建築)



図2-5-25 ~ 八丁蔵通りの全景

まるや建造物配置図



図2-5-26 まるや建物配置

まるや事務所は、明治6年(1873)に建築され、西側増築部には採光、通風のための縦に格子状に開口部を設けた虫籠窓があり、古いまちなみの風情を色濃く感じさせる建造物である。低湿地のため採用された石垣の基礎が今も残っており、外壁上部は漆喰仕上げで木組格子をもち、この地域固有の景観を特徴づけているとして、平成26年(2014)に景観重要建造物に指定された。



図2-5-27 まるや事務所

この八帖地区は、我が国の主要幹線である国道1号に隣接するも、旧東海道沿いを中心に八丁味噌関連の歴史的な建造物等が建ち並び、地場産業と住宅が共存する、落ち着いた環境で、平成18年(2006)には、NHKの連続テレビ小説「純情きらり」の舞台となるなど、地域固有の歴史的なまちなみ景観が形成されている。

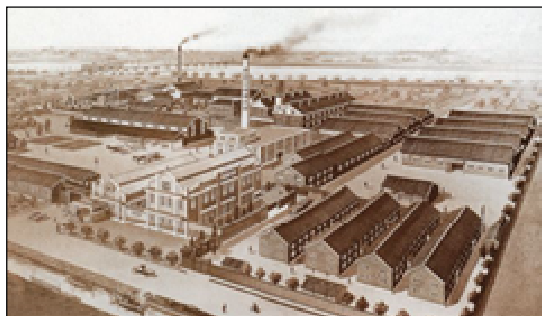


図2-5-28 カクキュー本社の完成理想図

昭和初期に描かれたカクキュー本社の完成理想図

服部臣宏氏作成

現状はほぼこの絵にそって建築されてきた。(中央左下が昭和2年(1927)年完成の現本社事務所)

(4)郷土食としての八丁味噌

早川家の創業口伝によると、貞治元年(1362)矢作川右岸の^{へこし}舳越村の屋敷で自家用の豆味噌を製造したと伝え、大田家の口伝では、延元2年(1337)、八丁村で酒造りから味噌造りに移行したとある。この両家に共通しているのは、自家用の豆味噌を3年間放置したものを食べたところ風味がよかったので、兵食や庶民層の需要に応じ、醸造業に転移したと伝えている点である。

このことは、すでに室町時代には矢作川流域の農家では自家用の豆味噌を製造し食していたことを物語るものといえる。矢作川流域は台地と自然堤防に恵まれ、古来より低地における稲作のほか、クワ・ワタ・ダイズ・ダイコン・イモ等が栽培されてきた。そして1400年前後より味噌・味噌汁として庶民の食膳にあがり、特に戦国時代には、兵食又は保存食品として重用され、需要の高まりとともに製法も工夫され普及してきたと考えられる。

八丁味噌の特徴としては、耐保存性だけでなく、栄養価が高いことがあげられ(蛋白質・脂肪・カロリーなどは他の味噌の2倍)、特に人体必須アミノ酸・脂肪酸の含有特殊食品であることがわかっている。天保7年(1836)の『参河志』には、「三河国朝夕食汁に赤味噌を用ゆ、他国にはなし」^{ようそ}瘍疽(はれもの)・^{ちようそ}疔瘡(できもの)・^{るいれき}癩癧(るいれき)・^{しよくみ}癩痞(さしこみ)の病人は稀なり、

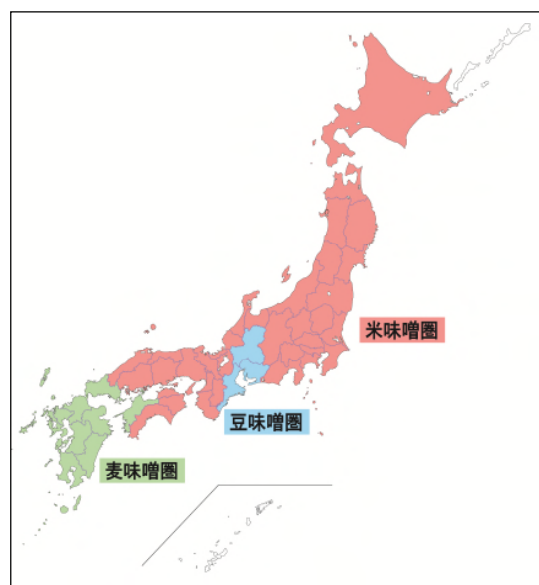


図2-5-29 味噌分布地図

思ふに当国は朝夕赤味噌を用る故なるべし」と記されており、江戸時代には三河の地において味噌汁を始めとした赤味噌文化が毎日の食卓に欠かせない日常食として根付き、さらに他の味噌とは違った栄養価があることにすでに気づいていたことが読み取れる。

そもそもこの八丁味噌の母体と考えられる豆味噌は、全国の中でも東海三県(愛知、岐阜、三重)で常食とされてきた。この地方の夏は高温多湿で酸敗が起りやすかったため、米味噌や麦味噌よりも、高温に耐え長期保存ができる豆味噌が個性的な伝統食品として定着したのである。この豆味噌は煮込んでも香りの変化が少なく、食材への香りの吸着と油の乳化性に優れ、特に肉や魚介類の旨みを相乗的に高めるとともに、その味を補強し調和させるという優れた調理機能を持っている。これが東海地域に味噌料理の多い食文化をつくってきた。

その中でも八丁味噌が天下に名声を博したのは、何と云ってもその香りと味の良さによる。長期熟成の寝かし味噌なので、生で食べても辛すぎず料理にしてものびが利き、その独特の風味が様々な料理を引き立てるとされる。また、「摺ってよし、摺らず猶よし、生でよし、煮れば極よし、焼いて又よし」といわれる八丁味噌は、料理用途が広く、艶のある濃い赤褐色の色沢は田楽のたれに最適であり、焼き味噌にも煮味噌にも合い、味噌汁でもよく食される。

この西三河地方に伝わる冬の農家の郷土料理「煮味噌」は、人参・葱等の野菜と油揚げ・蒟蒻等を自家製豆味噌(赤味噌)でじっくり煮込んだ鍋料理で、現在でも各家庭の味付けがあり、冬の家庭料理の代表のため、他の味噌料理と違って料理店で供されることがないのが特徴である。

このように、古くから三河武士を始め、農民、町人たちに親しまれ、今日まで様々な料理で日々の食卓を彩ってきた八丁味噌は、市民にとってはなくてはならない郷土の味となっている。まさに風土に培われ、庶民の嗜好性に支えられて成立した代表的な伝統食品である。

そして、近年では、八丁味噌に含まれる塩分量が他の味噌に比べて少ないことなどもあり、健康食としてますます評判を高め、その人気は国内だけでなく、世界20カ国以上に渡り、無添加の自然食品として特にヨーロッパ等でも注目されている。



図2-5-30 味噌田楽



図2-5-31 煮味噌

(5)おわりに

八丁味噌は、その名に「八丁」を冠するように、歴史あるこの地において、三河武士の資質・質実剛健をそのままに300年以上変わらぬ伝統製法を^{かたく}頑なに守り継ぎ、歴史的建造物の味噌蔵で時間をかけてじっくり醸造されてきた。また岡崎人にとっては日々の生活に浸透しているかけがえのない故郷の味であり、まちを歩くとほのかに漂う味噌の香りとともに、歴史に裏付けされた誇りある蔵造りのまちなみ景観が風情を漂わせている。八丁味噌にみる歴史的風致は、まさにこの土地の風土と歴史が育んだ伝統的地場産業の風致である。

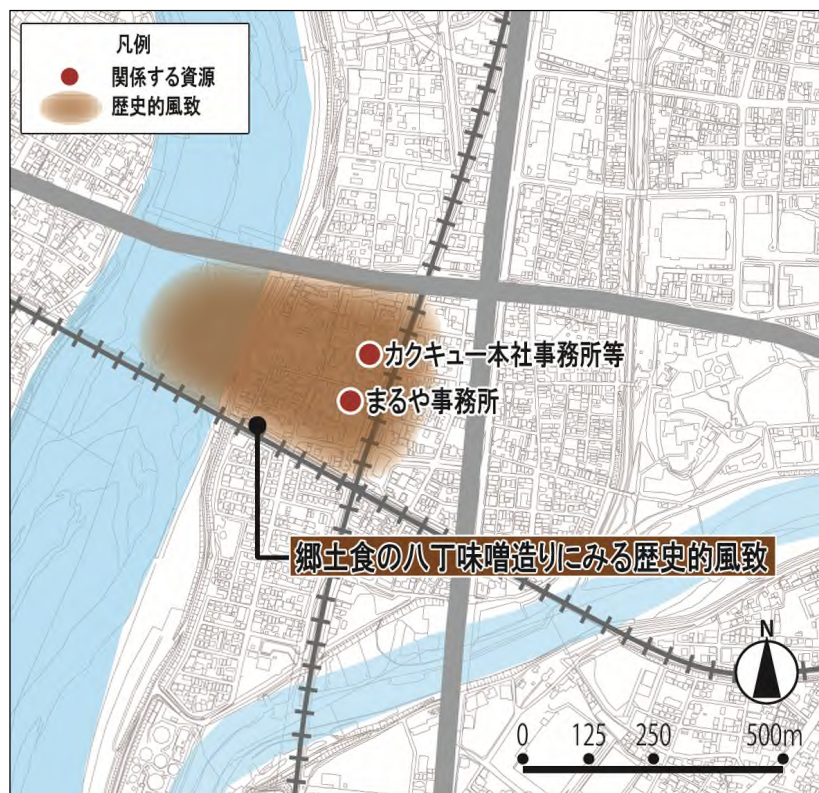


図2-5-32 郷土食の八丁味噌造りにみる歴史的風致の範囲



日吉丸と蜂須賀小六の出会い

後に豊臣秀吉となる日吉丸は8歳の頃に奉公に出されたが、12歳のとき奉公先の陶器屋を逃げ出し、家へ帰るわけにもゆかず東海道を東へ下る途中、疲れて矢作橋の上で寝ていた。そこへ野武士の頭だった後の蜂須賀小六が現れ、日吉丸の頭を蹴った。日吉丸は「詫びていけ」と言って小六を睨みつけたが、小六は、子どもにしては度胸があると思い「手下にするから初手柄をみせよ」と言うと、日吉丸は同意し、橋の東にある味噌屋の門近くの柿の木に登り、屋敷の中に入って門を開け、小六らを引き入れた。目的を達して逃げようとしたとき、家人が騒ぎ始めたので、日吉丸は咄嗟に石を井戸に投げ込み、「盗賊は井戸に落ちた」と叫びながら、家人が走り集まる隙に素早く門を抜け出たという。まるやの敷地には、その伝説にちなんだ井戸が今も残っており、矢作橋のたもとには2人が出会った様子を再現した「出合之像」が建てられ、乱世の時代劇を垣間見る逸話となっている。



図2-5-33 出合之像



図2-5-34 まるやの井戸

2-6.六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致

(1)はじめに

六ツ美地区は本市の南西端に位置し、原始より矢作川やはぎがわの氾濫原にあたり、肥沃な土地に人々の生産基盤が依拠してきた。人々の住居は洪水により形成された自然堤防上に立地し、生産基盤は沖積低地を利用した水田や畑であり、平野部の田園風景の中に集落が点在する地域である。古くから農業が盛んな地区であり、この地域特有の稲作儀礼をみることができる。

(2)用水開発

六ツ美地区は矢作川やはぎがわの氾濫原はんらんげんにあたり、近世以降も頻繁に氾濫に見舞われ、人々の暮らしは古来、矢作川の氾濫との戦いであった。矢作川の氾濫は洪水被害をもたらした一方で、上流部から養分を含む堆積物を運び込み、これが六ツ美地区の肥沃な土地を形成した。とはいえ、耕地への導水は課題でもあった。

①占部用水うらべ

占部用水は慶長8年(1603)に竣工し、矢作川流域で初めて開削された用水とされている。その後も改修されながら現在まで使用され、六ツ美地区20町地内を灌漑する用水である。現在の用水の大部分は埋管され、直接見ることはできない。慶長期(1596～1615)の占部用水開削の功労者である野本新十郎のもしんじゅうろうと渡辺弥蔵わたなべやぞうは占部川神社に用水の守護神として祀られ、神社では毎年6月16日に「水恩忌」として祭りがおこなわれている。また、明治18年(1885)には二人の偉業を後世に伝えるため、「占部用水の碑」が思案橋のたもとに建てられた(昭和27年(1952)に占部川神社に移転)。

②高橋用水

高橋用水は明治時代初期に着手し、昭和33年(1958)に完成した。高橋町地内を水源とし、六ツ美地区13町内を経て西尾市にいたる。高橋用水は大正4年(1915)の大嘗祭だいじょうさい悠紀齋田ゆきさいでんに用水を供給した。

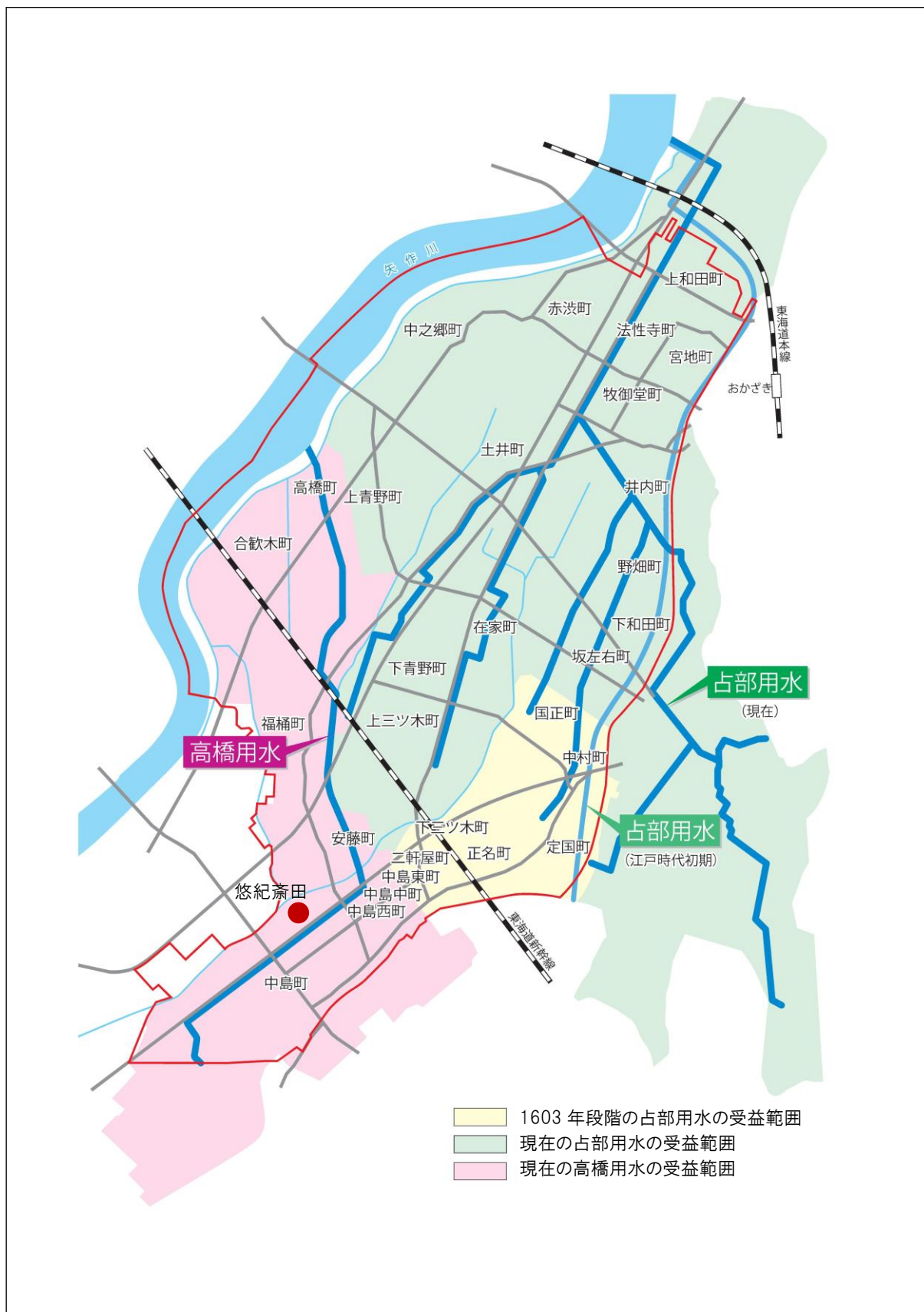


図2-6-1 用水配置図

(3) 耕地整理

六ツ美地区で最初に耕地整理に着手したのは中島地区で、明治33年(1900)に耕地整理法が施行された直後に耕地整理事業に着手し、明治37年(1904)に完成した。中島地区の耕地整理は全国的にみても先駆的なもので、愛知県内では最初の耕地整理事業であった。この後、明治39年(1906)から上合^{ねむのき}、下合^{ねむのき}、高橋、下青野、福桶、安藤、高落等の地区で連合整理が行われ、明治42年(1909)に竣工した。大正元年(1912)からは高橋、赤渋、中之郷の連合整理が行われ、大正4年(1915)に竣工した。耕地整理や先にあげた用水整備により、六ツ美地区の収穫高は向上した。

また耕地整理により湿田から乾田となったことで二毛作が可能となり、昭和初期には菜種栽培で全国1位の生産量を誇るまでにいたった。当時、^{はすみ}羽角山から見渡すと六ツ美地区は黄色い絨毯(菜の花)で一面が埋め尽くされていたといわれるほど菜種栽培が盛んに行われていた。当時を記憶する人々には菜種の花が咲く時には養蜂家が蜜蜂を運んできて「はちみつ」の採集をするなど、はちみつの香りただよう美しい豊かな農村であったと懐古される。

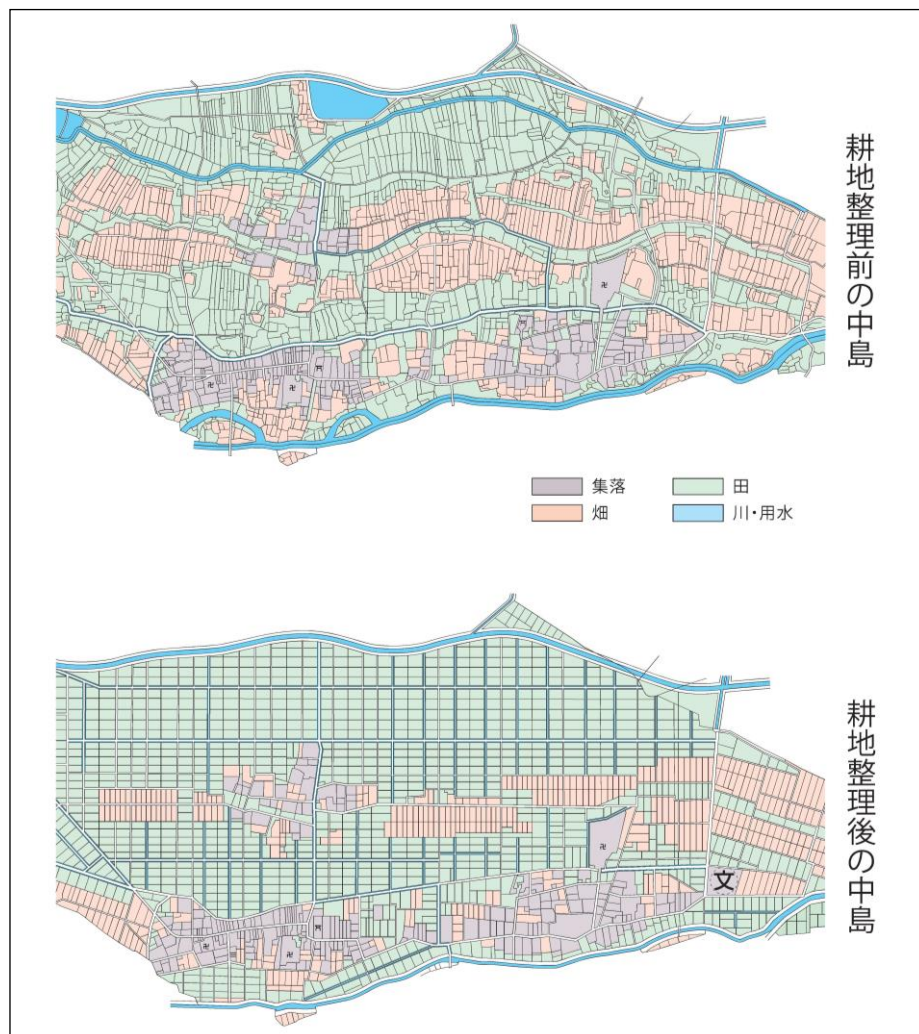


図2-6-2 中島地区耕地整理前後の状況

(4)六ツ美地区内の祭り

肥沃な耕地と灌漑技術の発展などを背景に、農耕地帯として栄えた六ツ美地区では、農耕に関する祭礼行事や稲作儀礼が発達した。現在も残る六ツ美地区内の主な祭りとして、御田扇祭り、六ツ美悠紀斎田(中島町)、チャラボコ太鼓(中之郷町)、七夕まつり(上三ツ木町)、ちりから囃子(下青野町)がある。

(5)御田扇祭り

①御田扇祭りの歴史

御田扇祭りは、正式には「皇大神宮御田扇祭」といい、地元の人々からは「おうぎさん」「たおうぎまつり」と親しみを込めて呼ばれている。

御田扇祭りは、近世岡崎藩の農民支配制度である手永制度¹のもと、藩領である手永内で行われた五穀豊穰を祈る祭りである。史料によれば宝暦6年(1756)にはその存在が認められるが、当時は手永から手永へと御田扇が巡行する形態であった。明和6年(1769)に本多忠肅が藩主となると手永は6つに区分される。本多氏時代には大庄屋の居村を発着地として各手永内において巡村が完結する形をとっていた。各手永内での巡行は旧暦6月に20日間前後かけて行われていたことが史料からわかる。

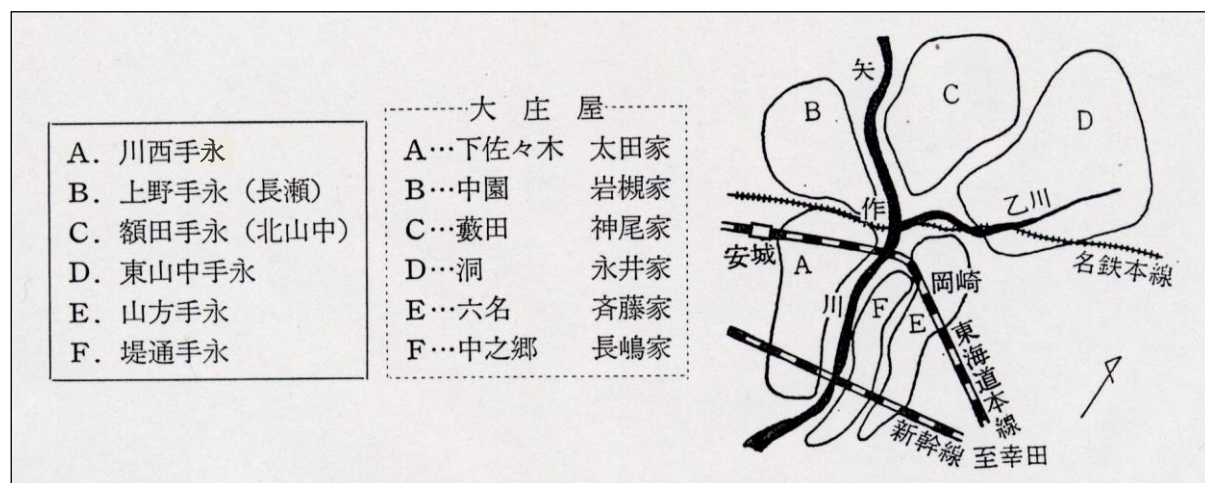


図2-6-3 六手永範囲と大庄屋

後本多家藩主時代には、御田扇祭りの開始(出発)時期の指示が岡崎藩から出され、6手永で一斉に開始されている。また、文化14年(1817)に伊勢神宮祓札の受取を大庄屋に命じる史料があり、天明元年(1781)に岡崎藩が伊勢御師の山本大夫と春木大夫の兩人に扶助し、家中扱いとしている事実を勘案すると、御田扇祭りと伊勢信仰が藩主導の下に結び付けられたも

¹ 手永制度は大庄屋制度ともいわれ、水野忠善が岡崎藩主に就任した正保2年(1645)に成立したとされる。寛文4年(1664)時点で9手永に区分され、それぞれに大庄屋が置かれていた。大庄屋に各手永内の村々を支配させた制度であり、全国的にも導入した藩は希少である。

のと想定される。

実際に額田手永の神輿の中から春木大夫銘の大麻が発見され、伊勢信仰と御田扇祭りとの関わりを示す資料として注目される。神輿内には現在、伊勢神宮外宮の豊受大神宮の御神札が納められているが、かつて額田手永や山方手永では扇が、川西手永では扇と鍬形が納められていたことが確認されている。



図2-6-4 額田手永の扇

このように、御田扇祭りは岡崎藩の農民支配制度の中で、虫送りや伊勢御師の廻壇配札行為と結びつき行われてきた民俗行事と考えられる。岡崎藩の施策と密接に関わる御田扇祭りの存在は歴史的にも重要であり、他に類をみない民俗行事である点も大きな特色である。



図2-6-5 額田手永の大麻(春木大夫銘)

②現在の御田扇祭り

かつては岡崎藩の6手永全てで行われていたが、現在も神輿渡御を継承しているのは堤通手永、山方手永の2手永のみである。堤通手永は20町(うち4町は西尾市)、山方手永は13町(うち1町は額田郡幸田町)で構成している。

後本多家藩主時代には旧暦6月に約20日前後かけて手永内の村々を神輿巡行していたが、明治時代になってからは、1年に1町ずつ神輿を渡御行列により巡行する形態へと変化し現在にいたる。堤通・山方手永とも田植えが終わった7月に1日かけてマチからマチへと移動する。

表2-6-1 御田扇祭り関係神社一覧

堤通手永			山方手永		
1	中之郷	中之郷神社	1	井内	八幡宮
2	上青野	樺宮神明宮	2	下和田	犬尾神社
3	高橋	神明社	3	国正	稲荷社
4	上合歎木	神明社	4	正名	占部川神社
5	下合歎木	神明社	5	永野	永野神社
6	高落	神明社	6	定国	素盞鳴神社
7	新村	神明社	7	中村	占部天神社
8	西浅井	白山神社	8	坂左右	神明社
9	東浅井	社宮司社	9	野畑	鍬神社
10	安藤	鍬神社	10	若松	春日神社
11	福桶	三宮神社	11	針崎	御鍬神社
12	下三ツ木	三社神明社	12	柱	綿積神社
13	上三ツ木	神明社	13	羽根	稲荷神社
14	下青野	樺宮神明社			
15	在家	神明社			
16	土井	社宮司社			
17	牧御堂	薬師堂			
18	法性寺	五社神明宮			
19	宮地町	犬頭神社			
20	赤渋	御鍬神社			

③堤通手永御田扇祭りの一例

御田扇祭りの行列の出発・到着は各町の神社となる。堤通手永を構成する1町である宮地町には御田扇祭りの起点となる神社として、上和田城主宇都宮泰藤²が貞和2年(1346)に犬のおかげで災難を逃れ、その犬の頭を祀ったという伝承のある犬頭神社がある。本殿は明治22年(1889)に、拝殿は明治34年(1901)に再建された神社である。

現在、祭りは7月20日前後の日曜日に行われている。神輿などを送る側の町の神社で神事を執り行うことから始まり、その後渡御行列が出発する。各町の女性部や子ども会も参加し、町の規模によっても異なるが、行列は300人を超えることもある。行列の最中には藩、町、人が繁栄するように願う祝歌が歌われる。青々とした稲の繁る田園地帯を幟や紅白の扇、花傘を持った人々が練り歩く様には、その年の豊作を願う人々の思いが表れている。送る側と迎える側の町境で受け渡し式を行い、行列は迎える側の町の神社へ向けて出発し、到着後に神事が行われる。地元の小中学生による浦安の舞、女性たちによる奉納踊りなどが奉納され、祭りは神社内でも大きな賑わいをみせる。

手永内の順村は、旧暦の6月に約20日間前後で一巡するものであった。この形式は江戸時代末期まで続き、明治時代に入って手永制度が終焉を告げても、祭りは6手永の中で存続していた。時代の流れに合わせて、次第に形態を変えてはいるが、先のとおり現在は2手永において存続している。

山並みを背景に、地形に起伏のない田園地帯に大屋根の社寺とその社叢が点在し、またそれら社寺を中心に集落が形成され、それを街道が結ぶ。五穀豊穰を願い、青々と広がる田園地帯の町から町へと神輿を中心とした渡御行列が巡行する姿は、岡崎市独特の歴史的風致となっている。



図2-6-6 犬頭神社



図2-6-7 堤通手永御田扇祭りの渡御行列風景
(平成24年(2012) 中之郷町から上青野町)

² 宇都宮泰藤(1302~1352年)は下野国宇都宮氏の末裔で、三河大久保氏の始祖とされる人物。南北朝時代に碧海郡上和田の妙国寺前に移り住んだ。孫泰道は宇津氏と改姓し、さらに泰道の5代孫の忠俊・忠員兄弟の時に大久保氏となったといわれる。

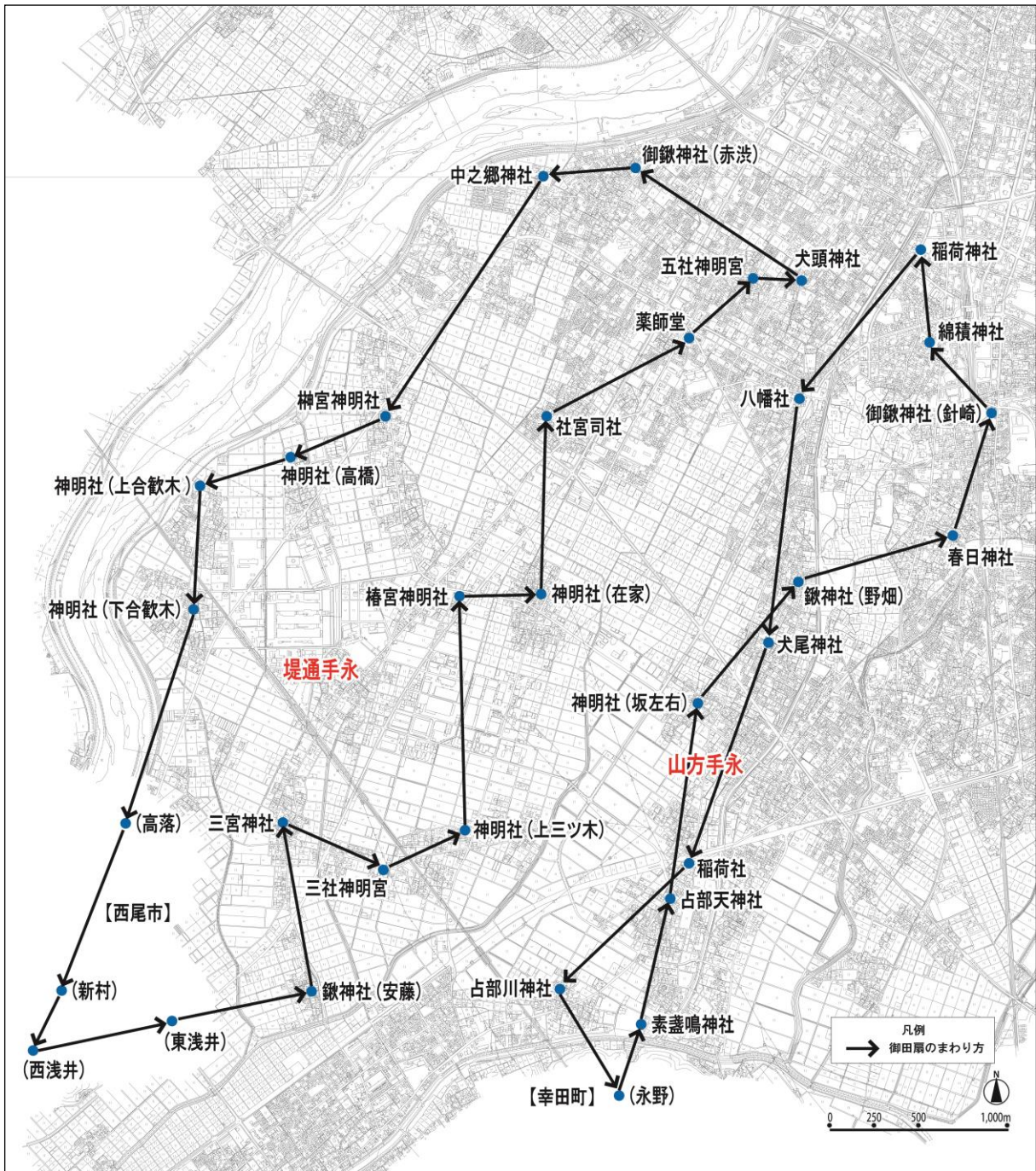


図2-6-8 御田扇祭りの巡回ルート(堤通手永・山方手永)

(6)六ツ美悠紀齋田お田植えまつり

①六ツ美悠紀齋田の歴史

大嘗祭は天皇が即位後、初めて行う^{にいなめさい}新嘗祭で、新穀をもって皇祖と神々を悠紀・^{すき}主基の両田に迎え、収穫祝いと今後の豊作を祈願する宮中の儀式である。京都を中心に東日本を「悠紀の地」、西日本を「主基の地」と称し、大嘗祭に供える米を作る田を齋田という。大正4年(1915)の大正天皇即位の大嘗祭では、悠紀齋田に六ツ美中島の4反歩(約 3,960 m²)、主基齋田に香川県^{あやうた}山田村(現・香川県綾歌郡綾川町)が選ばれた。齋田地として選ばれた背景には、耕地整理が完了していたこと、用排水路が整備されていたこと、交通の便がよいことが理由としてあったといわれている。

中島の地が大嘗祭悠紀齋田に決定されると、八幡社社務所が大嘗祭悠紀齋田新穀奉納事務所となり、境内には農具小屋・清齋所・井戸・休憩所・精米所などが建てられた。境内中央北側には悠紀齋田の時に使われた農作業道具を入れた収納庫が今も残されている。また、八幡社社殿の北側には昭和8年(1933)12月に建てられた大正宮がある。この社には大正天皇が祀られており、以前はお田植えまつりの神事が行われ、お田植踊りが奉納されていた。現在、お田植えまつりは悠紀齋田広場で行われている。

大嘗祭に新米を供納した後も、これを記念して毎年6月第1日曜日に悠紀齋田お田植えまつりとして、長年にわたり保存・継承されている。

②現在の六ツ美悠紀齋田

大嘗祭の終了後も、齋田奉耕者やその子孫、村民有志等によって齋田地は保存され、田植唄を歌いながら踊り、昔ながらの装束・農具を使って苗を植え、その年の豊作を祈願する「お田植えまつり」として続けられている。六ツ美村青年会など地元の関係者を中心に続けられ、昭和41年(1966)には岡崎市指定無形民俗文化財に指定された。昭和47年(1972)には「六ツ美悠紀



図2-6-9 現在の悠紀齋田



図2-6-10 大正宮



図2-6-11 お田植えの風景

斎田保存会」が設立されそれまでの活動を引き継ぎ、現在まで継承されている。

現在は、悠紀斎田の古跡地に六ツ美地域の歴史や文化財などを紹介する六ツ美歴史民俗資料室を核とし、六ツ美地域の歴史・文化の保存と伝承、地域交流の拠点となる地域交流センター六ツ美分館「悠紀の里」が整備され、平成26年(2014)2月に全面開館した。斎田は悠紀の里の悠紀斎田広場に移設された。

お田植えまつりの当日は、事前の祈願祭が八幡社で行われる。斎田広場では午後2時から神事が執り行われ、神官により五穀豊穡などを祈願する内容の祝詞が読まれ、参列者による玉串奉奠が行われる。祭りは式典の後、お田植唄に合わせて、地元婦人会や小学校女子児童によるお田植踊りが披露される。お田植唄の拍子に合わせて斎田周辺を早乙女が踊りながら練り歩き、実際に苗が植えられていく風景は、大正時代から受け継がれてきたものである。平成27年(2015)には悠紀斎田100周年を迎え、記念式典が秋篠宮同妃両殿下の御臨席のもと盛大に開催された。100周年記念事業を開催するにあたっては、平成24年(2012)に地元で実行委員会を立ち上げ、六ツ美地区が一体となって準備を行ってきた。お田植えまつりを継承することにより、稲作文化の伝承、地域交流・地域活性化を図っている。



図2-6-12 お田植踊り

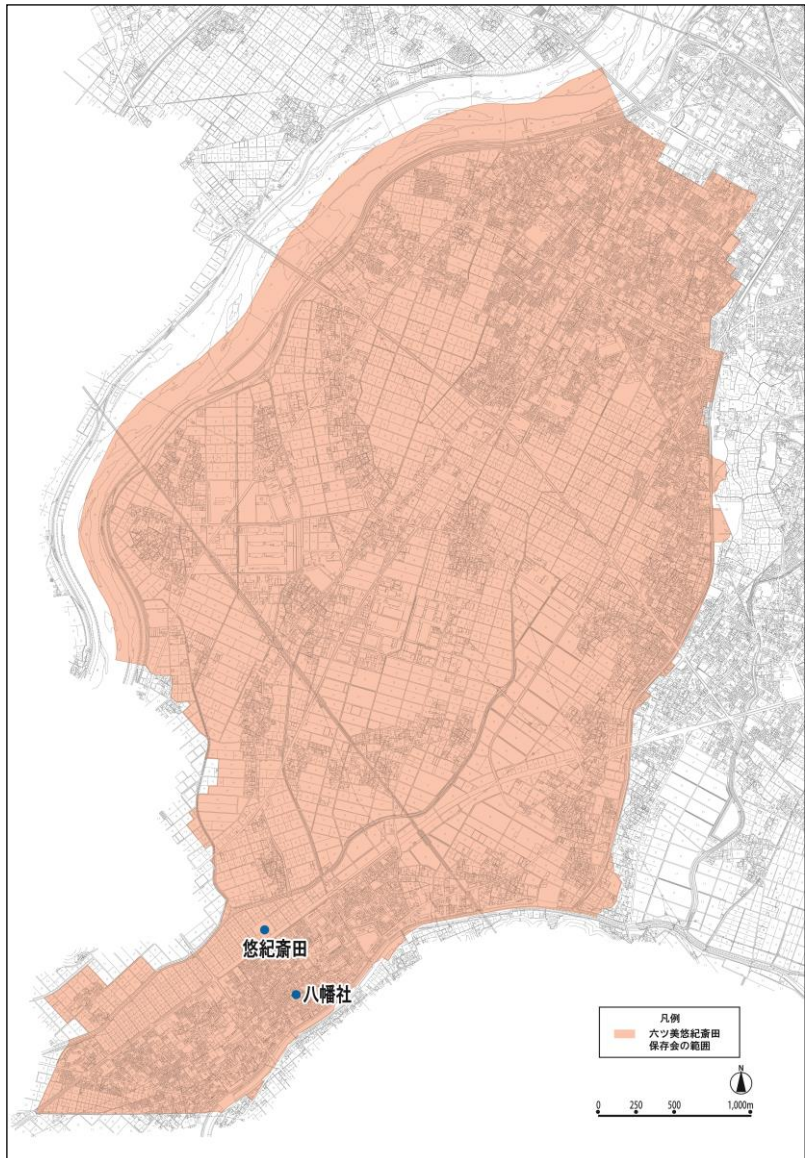


図2-6-13 悠紀斎田保存会の範囲

(7)おわりに

このように、六ツ美地区は近世以降、県内でも先進的な農業地域としての歴史をもつ。また、近世には岡崎藩の農民支配体制の施策と相まって御田扇祭りという独特の民俗事例も生まれるなど、農耕儀礼に関わる民俗事象が色濃く残る背景には、現代まで農業を主たる生産基盤として発展してきたことがあげられる。

祭りを受け継ぐことを通じて、地域がまとまりをもち、さらには活性化へとつなげていこうとする団結力を感じることができる。稲作儀礼の伝承に地域をあげて取り組み、六ツ美地区特有の歴史・文化を次の世代に伝えていこうと努力している姿は、地域に根差した新しいコミュニティ作りの姿でもある。市街地では宅地化が進み、従前よりも田畑は減少しているが、田園地帯に社寺が点在し、その周辺に集落が形成されている風景は、農作業や祭りを行う人々の営みが調和する歴史的風致であるといえよう。

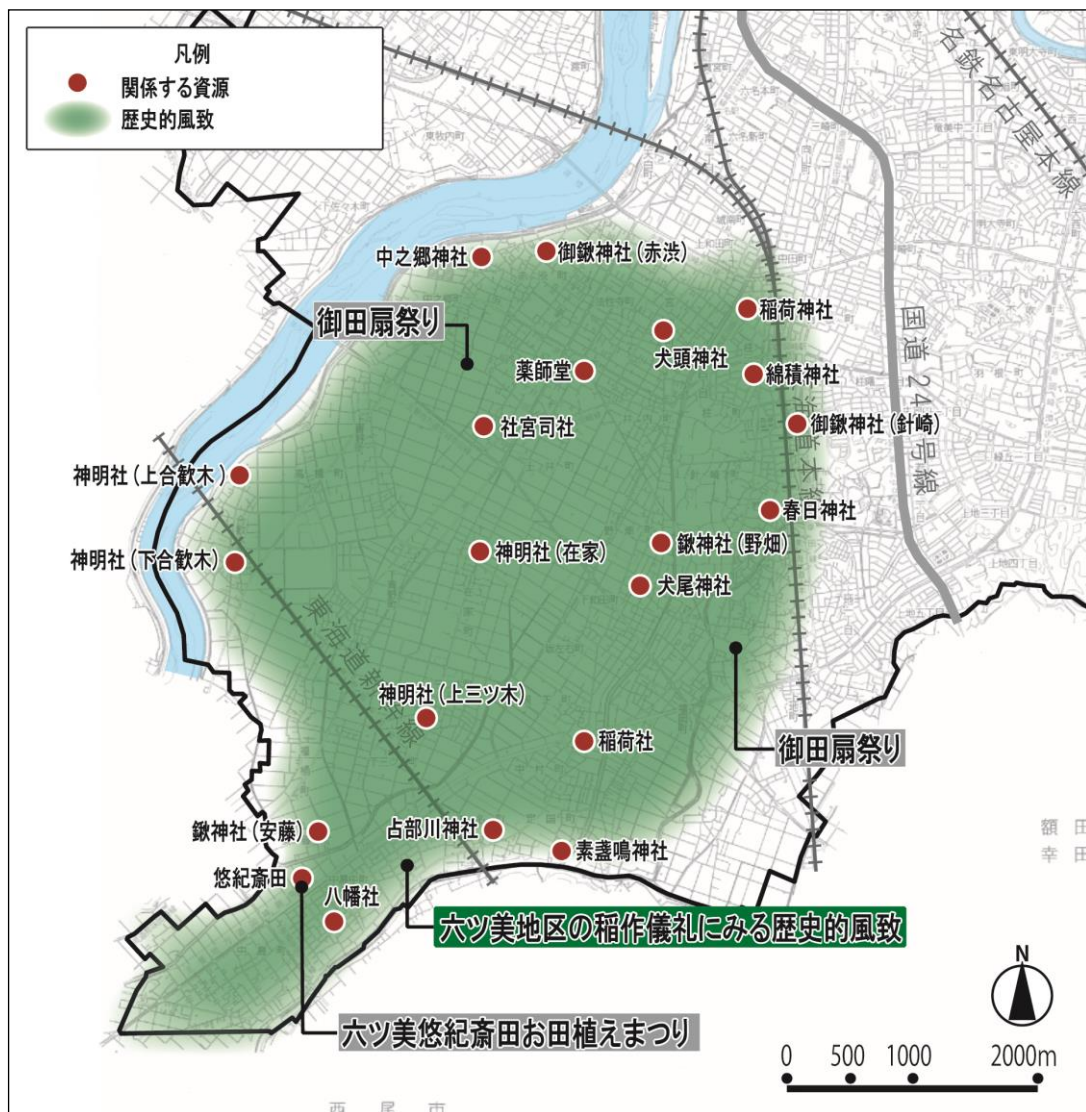


図2-6-14 六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致の範囲

2-7.額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致

(1)はじめに

市東部の額田地区は、三河高原の西端に位置している。額田東部には標高 400 メートルから 600 メートルの山々が連なっており、最東部には本市最高峰の本宮山^{ほんぐう}が位置している。これらの山々は、豊川市との市境を形成し、西三河と東三河の境界となっている。額田地区はその 98 パーセントが山地であり、南部の男川^{おとがわ}と北部を流れる乙川^{おとがわ}が作る溪谷沿いの平地に大小の集落が点在する。

北部の乙川水系は花崗岩帯で、谷底が浅く広く発達した地形であるため耕地が比較的得やすい。古く旧石器時代の西牧野遺跡や縄文時代の牧平遺跡^{まきひら}などの遺跡が形成されてきた。南部の男川水系では領家変成岩類の広がる急峻な山とV字谷が多くみられ、山の斜面が棚田として利用されてきた。鎌倉時代から室町時代の中頃までは足利氏とその一族の勢力が入り込み、戦国時代には日近城(桜形町)を拠点とした奥平氏^{おくだいら}が溪谷ごとに奥平庶家を配置し、一帯を支配した。江戸時代には約 50 か村に分かれ、幕府領、岡崎藩や鳥羽藩^{にしおおひら}、西大平藩等の大名領、戸田家や巨勢家^{こせけ}等の旗本領、天恩寺等の寺社領が入り組み、領主も入れ替わった。額田地区では、このような自然条件の違いに適応しながら、独自に営まれてきた人々の暮らしと民俗事例をみることができる。

(2) ぜまんぢよう 千万町の神楽

千万町の神楽は八剣神社^{やつらぎ}(千万町町)で4月第3日曜日の春祭りに豊作と悪魔祓いの願いを込めて奉納される神楽である。

八剣神社は、文永3年(1266)創建と伝えられ、同年の棟札が残されている。本殿は絵様等の様式から江戸時代後期文化年間(1804~1817)頃のものだと推定される。

宝暦元年(1751)の文書には、この年の祭礼で神楽を舞ったという記録が残っている。ここで奉納される神楽は獅子舞神楽である。獅子の頭をつけ女物の着物を身につけた舞方が舞うため、嫁(娘)獅子神楽とも呼ばれ、その起源は歌舞伎を取り入れた獅子芝居であるとされる。



図2-7-1 八剣神社



図2-7-2 千万町の神楽 八剣神社での神楽奉納



図2-7-3 千万町の神楽 若宮社での神楽奉納(ホラの舞)

祭礼当日、朝8時より関係者が神社にて幟、神輿、獅子頭等の準備を行う。午前9時から八劔神社境内の矢場では祭礼弓の参加者が弓射を始める。金的中するまで神輿渡御のお練はできないとされ、弓射は祭礼の重要な役割を担っている。弓射と並行して、午前10時に開始される神事の後半で神楽が奉納される。午後2時頃には、送り囃子が奏される中、若宮社への神輿渡御となる。囃子の音を聞き、集落の人々が行列に加わる。若宮社に到着すると、神官らの参拝が行われ、その後、神楽が先程よりも賑やかに舞い、見物人を楽しませる。午後4時頃、戻り囃子が奏される中、神輿は若宮社を後にして八劔神社へ還御する。

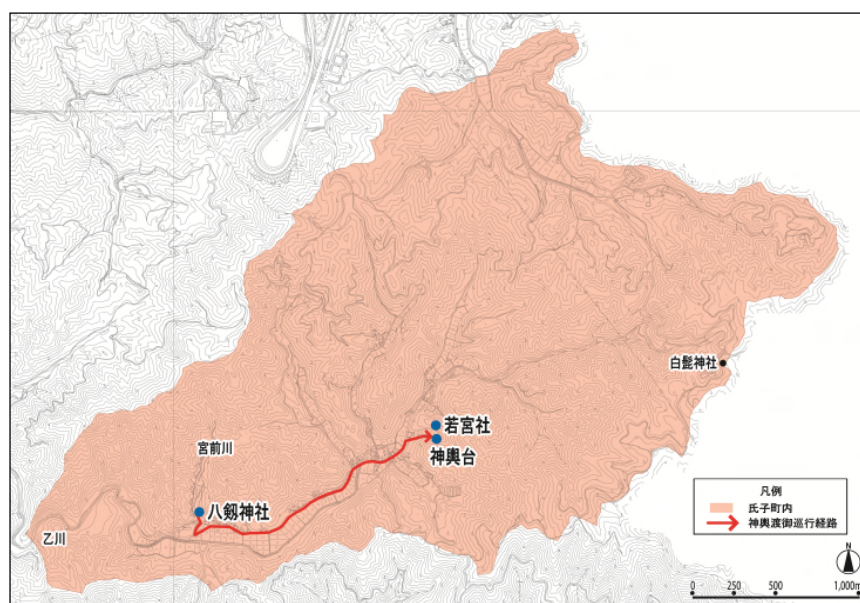


図2-7-4 千万町の神楽 御輿渡御巡行図

(3) 須賀神社の祭礼山車と祭りばやし

額田地区の中心となっている檜山町にある須賀神社では「檜山の山車祭り」と呼ばれる春の祭礼が行われている。須賀神社は、本殿に永正10年(1513)の棟札があることから、室町時代後期には創立されていたと知れる。現在の本殿は建築様式から18世紀中期の建物と考えられる。

祭礼は口伝では江戸時代から続くとされ、明治8年(1875)の『祭礼記』に当時の様子が記されている。旧暦6月の祇園祭として催されていたが明治末期より4月14日となり、近年は4月第2日曜日が祭礼日である。綱を氏子総出で曳く様子から、「蟻子祭り」とも呼ばれていた。



図2-7-5 須賀神社



図2-7-6 須賀神社から神明宮へ祭礼山車の巡行

春のうららかな日の中を芽吹き始めた山々を背景に、山車と花車に続き、提灯、幟等のお手道具と神輿の行列が檜山町内の男川河畔にある神明宮までまち中を渡御する。神明宮では祭囃子を奉納し、夕刻に須賀神社へ帰着する。現在、山車は4台あり、明治28年(1895)頃製作の竜神丸(原組)、同じころ能見町より譲り受けた恵比寿丸(仲組)、鳳凰丸(庄野組)、平成10年(1998)新造の新若丸(新居野組)で、河瀬・宮北市組は花組と称し、花車(チャラボコ)で参加している。祭り囃子はこれらの山車の上で演奏され、囃子の伝承には、それぞれの組が

工夫・努力をしている。

また、神明宮で行われる年番の組による「^び御照覧」は囃子を神に奉納するだけでなく、囃子の型を守り伝える意味もある。

祭りの準備は、3月下旬から須賀神社の傷んだハギコ(ハギの枝製玉垣)を替えるため、ハギコ集めをすることから始まる。ハギコ作りは年番の役目で、祭礼の2週間程前に傷んだ所を作り変える。前日には、御照覧舞台作り等の準備を行い、当日は朝から各組が山車の飾り付けを須賀神社境内で行う。御神体を神輿へ移す時は、拝殿の幕が降ろされ、神主と神輿を担ぐ者以外は拝殿より外に出る。

祭礼は午前11時30分、山車のお祓い後に年番組を先頭に宮出となる。4輛の山車に続き、お手道具(御神灯、梵天、赤提灯、鉦等)、神輿と続く。午後1時頃、まちの中心である4叉路の辻にて中休みをし、ここで花組が合流する。辻の特設舞台では余興が行われ、午後2時頃神明宮に向けて出発する。神明宮に到着後、式典及び「御照覧」が行われ、年番を務める2組がそれぞれ特設舞台において、お囃子を披露し、午後3時30分に神明宮を出発する。午後4時30分頃、須賀神社前に到着し、祭りのクライマックスともいえる境内横の急な坂を順次、山車、花車を上げていく。

(4)夏山八幡宮の火祭り

夏山八幡宮(夏山町)は、平針、^{てらだいら}寺平、柿平、鬼沢、寺野の5集落の総氏神で、由緒書によれば、^{ぬかたべのさだはる}額田部貞春が三河国夏山郷柿平を開き、継体天皇25年(531)に祖神を祀ったのが始まりとされ、元慶4年(880)に応神天皇始め、6柱を合祀し王宮八幡宮と称し、後に夏山八幡宮と改めたと伝わる。棟札によると、一間社流造の本殿



図2-7-7 神明宮での祭り囃子奉納(御照覧)

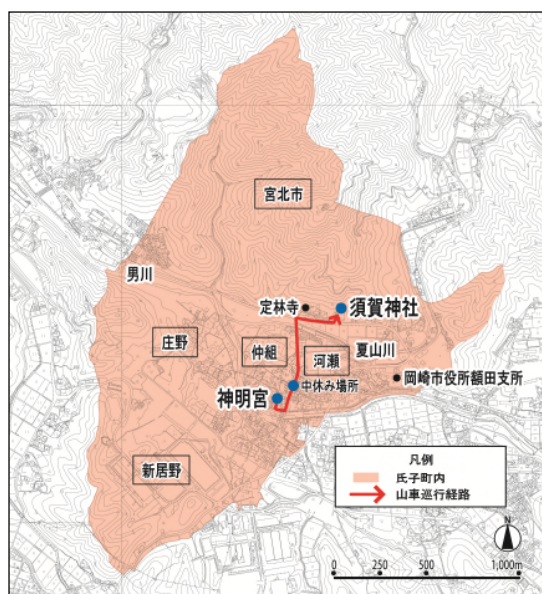


図2-7-8 須賀神社の祭礼山車巡行図



図2-7-9 夏山八幡宮

は明治27年(1894)、拝殿は明治12年(1879)、神楽殿(舞殿)は昭和10年(1935)の建立である。舞殿は、幣殿と拝殿の間に建てられている。また、火祭りに使用したといわれる永禄元年(1558)の銘のある獅子頭が宝物として伝承されている。

火祭りは、旧暦9月9日近くの土曜日に夏山八幡宮境内で行われる勇壮な火祭りである。町内の柿平・平針地区が1年ごとに当番となり祭りを執行している。1年交代で、祭りを行うようになったのは、明治36年(1903)からである。

火祭りの準備は当日の午後0時30分頃から行われる。境内周辺の森から鉋でスギ・ヒノキ以外の生木を伐採し、拝殿前の広場に高さ3メートルほど積み上げて「ソダ山」を築く。そして厄男や若者から選ばれた「太夫^{たゆう}」と呼ばれる鬼役が、白装束に身を包み水垢離^{みずごり}し、潔斎を行う。水垢離の場所は、担当の集落で異なる。柿平は八幡宮裏手にある集落の庚申を祀る川の淵で、平針は集落の山中で不動明王を祀る滝である。その後、八幡宮に戻り、拝殿内で神火^{おこ}を熾し、神降ろしを行う。この後、祭りはソダ山に火を

つけて、面を被った鬼と鬼の師匠的な役割を果たす「ババ」が様々な所作事を行うことで進んでいく。鬼はババの所作事を真似るが、上手く真似られないとソダ山から燃え木を持ち、境内の参拝者を追いかける。

参拝者は「ボケ、ボケ」等と鬼を囃し立てながら逃げ回り、両者が一体となって祭りを盛り上げる。鬼の持つ燃え木に打たれるとその年は病気にかからないとされる。



図2-7-10 夏山の火祭り ソダ山の点火



図2-7-11 夏山の火祭り 鬼追い



図2-7-12 夏山の火祭りの位置図

(5) 当(頭)屋祭祀

当(頭)屋とは、神社の祭りや講等に際し、神事や行事の世話をする人、またそのイエのことをいう。当(頭)屋が重要な役割を担って神社の祭祀が行われるため、当(頭)屋祭祀というのである。現在、当(頭)屋は1年交代で務めることが多く、その選出は紙クジあるいは家並順や帳簿等の記載に基づき輪番で行うことが多い。

① 宮崎神社「オトウの神事」(オトウダイコン)

明見町^{みょうけん}の宮崎神社には、オトウダイコンと呼ばれる神迎への神事が伝えられている。宮崎神社は、須佐之男命^{すさのおのみこと}等を祭神とし、創立は菅生神社(菅生町)の由緒に天平宝治元年(757)に播磨^{はりま}国広峰社より牛頭天王^{ごず}を勧請されたと記され、この時に万足平より現在地に天王宮として遷座され、明治当初に宮崎神社と改称された。寛永9年(1632)の棟札が残されており、この時に再建されたと伝えられるが、本殿は虹梁^{こうりょう}の絵様^{えよう}等からみて、江戸時代中期の元禄～宝永年間(1688～1711)頃の建立であると考えられる。

奥平氏が武田氏と戦った滝山合戦(天正元年(1573))の戦勝祝いに端を発すると伝わるオトウの神事(オトウダイコン)は、神社の氏子全体の行事としてではなく、明見町の行事として旧暦11月1日に行われる。神事は当屋制をとる祭祀で、オトウとは神事に用いるオトウダイコン(大根の味噌煮)を準備する役割を担う当屋を指す。オトウとなる社守^{しゃもり}は、毎年神事後にクジで2名選出され、明治32年(1899)から昭和35年(1960)までの記録が納められた箱を引き継ぎ、前年度の社守2名と共に任にあたる。以前は、オオトウ、コトウとイエを区別し、オオトウのイエが輪番で当屋を務めていた。神迎への2日前からオトウダイコンの仕込みが行われる。使用する大根は各戸から2～3本集められ、皮をむいた後長さ5寸(約15センチメートル)の輪



図2-7-13 宮崎神社



図2-7-14 オトウダイコンの準備



図2-7-15 オトウダイコン

切りにする。一昼夜かけて水煮及び調味液で味が染み込むまで煮込む。調理する大根は 200～250 本に及ぶ。この時、同時に神饌の一つで「オシロジロ」と呼ばれる洗米をすり鉢で粉状になるまで搗り、水を加えてどろどろにした液状のものを準備する。当日、朝6時からの神事には各戸から男性1名が参列し、社守がオトウダイコンを献供し神迎えを行う。神事後、直会にてオトウダイコンが振舞われる。

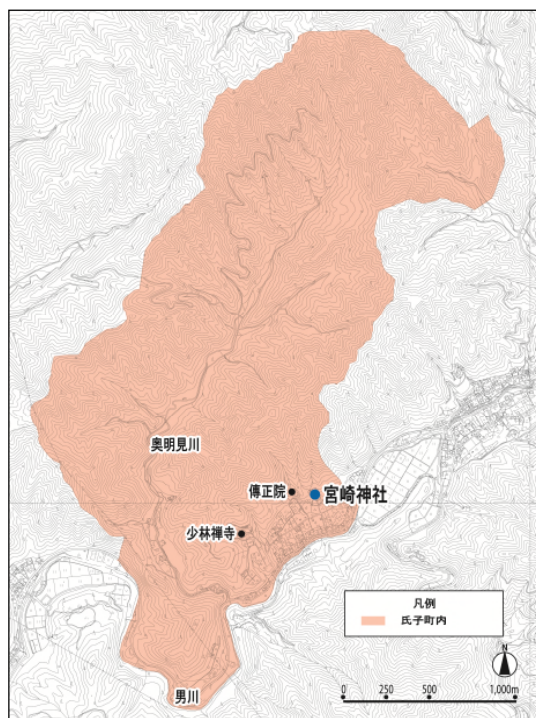


図2-7-16 オトウダイコンの位置図

②石座神社「神迎え神事」(アマザケトウ)

オトウダイコンの神事の1週間後に行われるのが、石座神社(石原町)の神迎え神事、アマザケトウである。

石座神社は、天照国照彦天火明命等を祭神とし、社伝で創建は明らかでないが南設楽郡東郷の式内社石座神社から勧請されたとされ、本殿についても棟札等の建立時期を示す資料はないが、虹梁や木鼻の絵様から江戸時代中期頃の様式と考えられる。昭和5年(1930)には拝殿、幣殿、渡殿が改築されている。

アマザケトウは、神社の六座社に「シロジロ」と呼ばれる桑と大根で作った船に白神酒(甘酒)を入れた神饌を供える神事である。神事の際に甘酒を献じる当屋をアマザケトウと称し、毎年4名がクジで選出される。選出されたアマザケトウは神事前日にオコモリをし、祭礼の準備と神饌の調整を行う。当日早朝には境内脇の室合地川で禊を行った後、神事に臨む。

これら当屋制をとる祭祀は近畿地方を中心に広がっており、岡崎市域ではあまり見られな



図2-7-17 石座神社



図2-7-18 大根舟・甘酒・シロジロ

いものである。額田地区では旧来とは少し変貌しつつも、現代のライフスタイルに合わせて当屋制の祭祀の形態を維持している好例である。

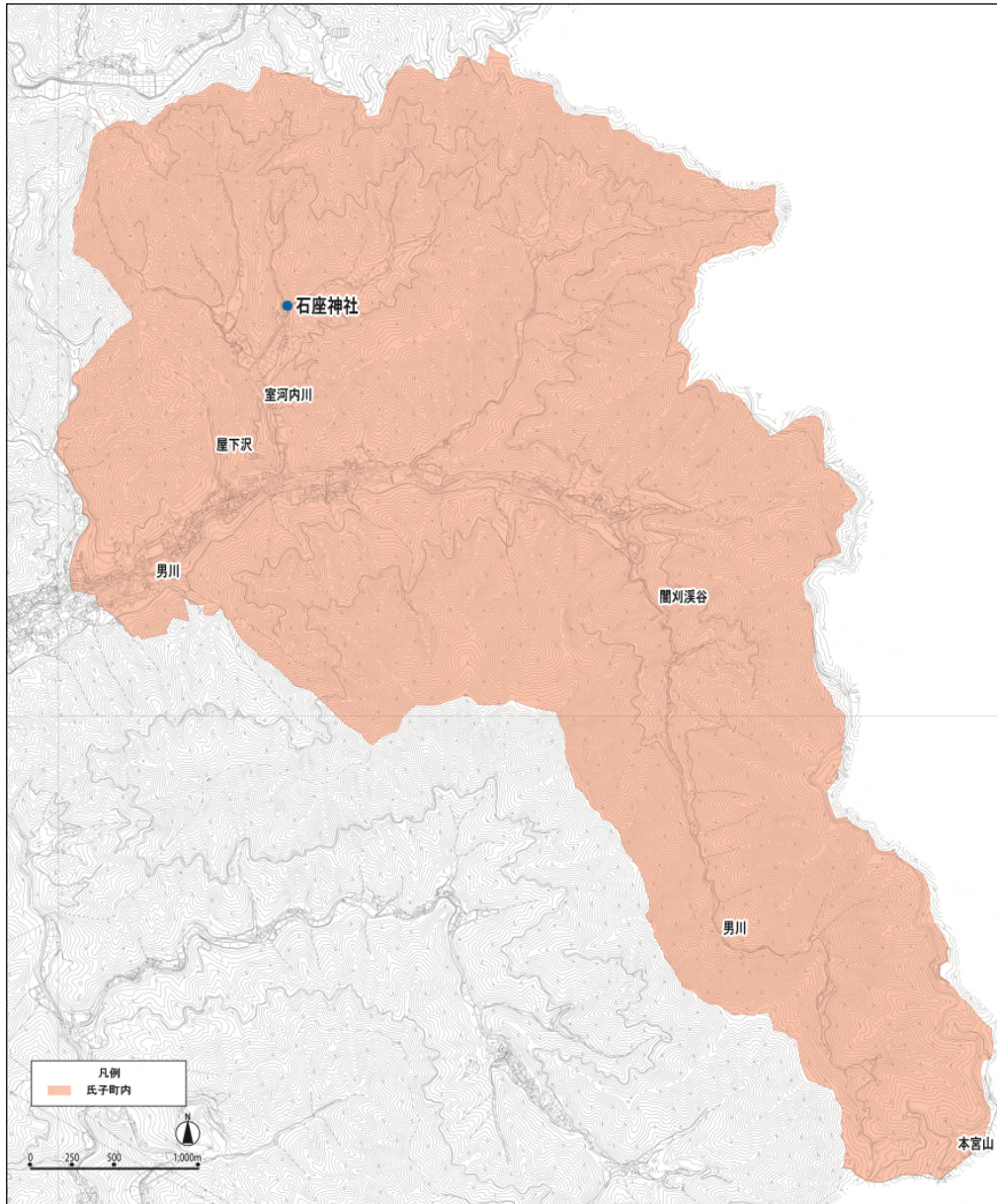


図2-7-19 アマザケトウの位置図

(6)コト八日行事

コト八日とは、2月と12月の8日に行われる行事の総称であり、全国各地で様々な行事が行われる。2月8日をコトハジメ、12月8日をコトオサメと呼ぶ。(地域によっては逆になる。)愛知県内で現在もコト八日行事を行っているのは、北設楽郡とおおじろ^{おおじろ}とあめやま^{あめやま}大代町と雨山町など数カ所のみで全国的にも分布の西端である可能性が高い。大代町と雨山町では、2月8日のコトハジ

メに、田畑や山の仕事を開始するにあたり悪霊を3体の藁人形(殿様・姫・下郎)に憑依ひょういさせて、子どもが「2月8日のコトハジメ」と唱え、鉦かねや太鼓を鳴らしながら集落境まで送る「オカタ送り」(オカタ=憑依させる人形とコシのことを指す。)が行われている。

①大代町の事例

大代町のコト八日行事は、永禄4年(1561)創建の曹洞宗正泉寺しょうせんじに集合し、和尚による読経、お祓いが行われる。お祓いが終わると、子ども達は、鉦(1人)、太鼓(2人)、人形(3人)、御幣(1人)の順番に並び寺を出発する。鉦1回、太鼓1回「2月8日のコトハジメ」と唱えながら行く。大人は、子ども達を送り出すとすぐに百万遍の数珠を取り出し、各戸より参加した大人達が車座になり、念仏が始まる。子ども達は、



図2-7-20 正泉寺

集落境に到着すると、人形と御幣を置き、軽く拝み、元来た道を決して振り返らずに、寺まで言葉を発せずに帰っていく。寺に着くと、百万遍も終了となる。昭和30年代まではそれぞれの家で八日餅をついて準備をした。コトオサメ行事(12月8日)も昭和50年(1975)頃まで行われていた。



図2-7-21 大代町のオカタ送り



図2-7-22 村境のオカタ場

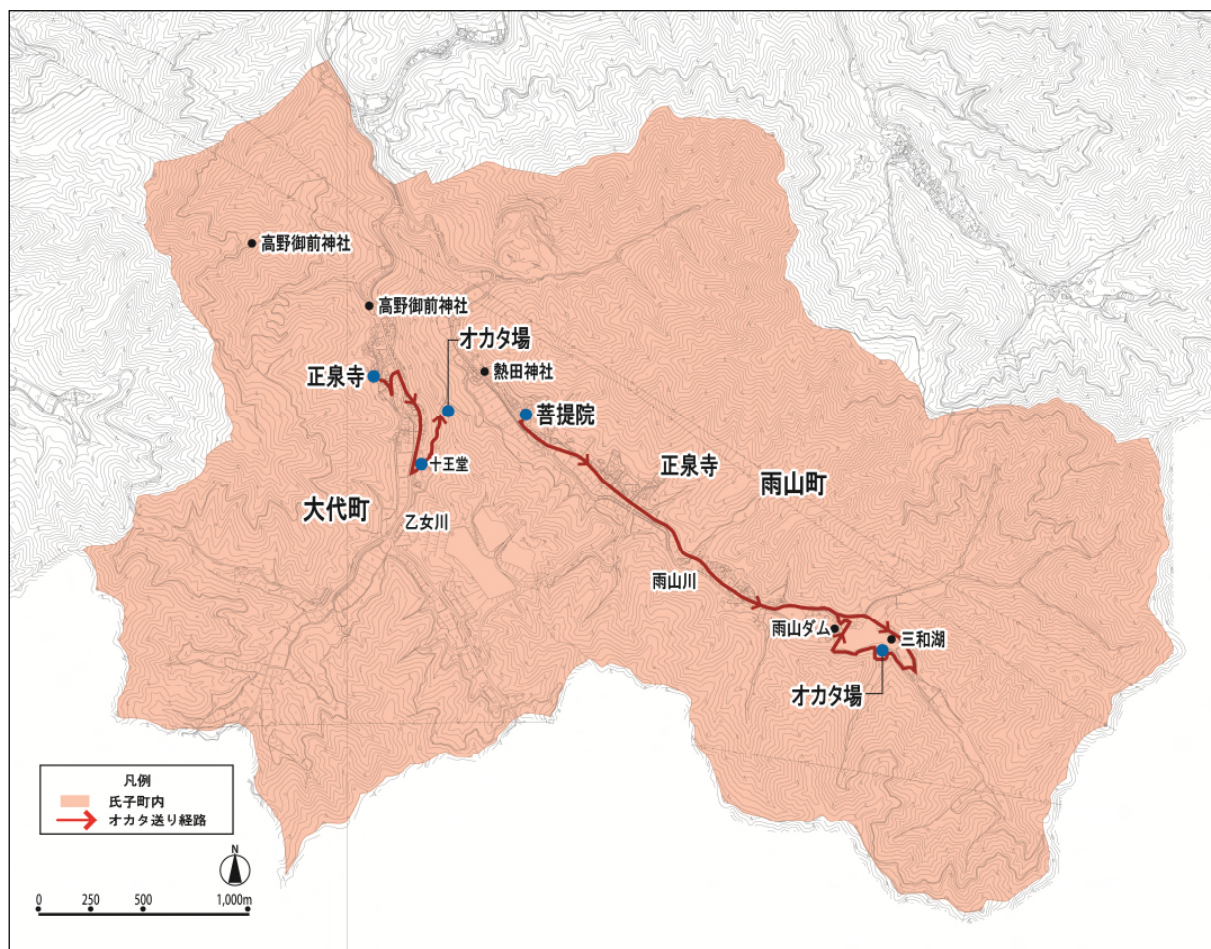


図2-7-23 オカタ送りの位置図

②雨山町の事例

菩提院は曹洞宗に属し、天文元年(1532)以前の創建で、棟札によれば元禄5年(1692)に本堂が建立されている。入母屋造り銅板葺き(旧茅葺き)、前面に広縁を通し、その奥に前後2列横3列の6室を構える方丈形式をとっている。禅宗寺院の本堂は方丈型が一般的であるが、ここではその前に露地と呼ばれる土間を通していている点に特徴があり、前面土間六室型の平面形式をとっている。江戸中期の貴重な建造物である。



図2-7-24 菩提院

雨山町のコト八日行事は、菩提院に集合し、和尚による読経、お参りが行われる。その後、子ども達は、鉦(1人)、コシに乗せた人形(2人)、ハタ(2人)の順番に並び、「2月8日のコトハジメ」と唱え、鉦を2回鳴らしながら行く。片道3キロメートルのオカタ場に到着すると、人形とハタを置き、手を合わせてお辞儀をし、振り返らず黙って帰る。



図2-7-25 雨山町のオカタ送り



図2-7-26 コシと人形

(7) ^{まんぞくだいら}万足平の猪垣

額田地区では祭礼のみならず、人々の生活により密着した事象として石積み文化が発展している。山間地という限られた耕地を補うため、緩斜面に平坦面を形成した石垣棚田や耕地を猪鹿等の獣害から守るための猪垣、家屋の土台となる石垣等、額田地区南部の男川水系に分布する領家片麻岩を巧みに積み上げる技術が今に伝わる。領家片麻岩は節理により板状に割れるため、ほとんど加工せず原石のまま石積みを利用できる利点があり、他の材料に比較して容易に築造できたものと考えられる。

猪垣は、高さ1.6メートル～2メートルで、石を垂直に積むものが大半であるが、イノシシに飛び越えられないと思わせるように山側に反らせて積んだものも見られる。この地域に特徴的で全国的にも希少な文化財である。建造時期は江戸時代中期から開始され近代まで続いており、築造方法もいくつかの形態・様式が確認されている。その総延長は50キロメートル以上とも推計されている。

額田地区の中金町^{なかがね}有文書には寛政4年(1792)に「猪垣」の記載があり、石原町有文書には享和3年(1803)に「^{おびただ}夥しく^{まか}罷り出た」猪、鹿、猿を防ぐため「金子を借り入れ石垣を積み候」、天保5年(1834)「猪鹿之垣」とあり、近世から猪垣を築き耕地を獣害から守ってきたこ



図2-7-27 万足平の猪垣(中金町)



図2-7-28 孫左衛門の石垣(淡瀬町)

とが記録されている。

県指定有形民俗文化財に指定されている「万足平の猪垣」では、高さ約2メートル、底幅1メートル、上幅0.6メートルの造りで現存延長612メートルあり、文化2年(1805)と天保3年(1832)の2度にわたり築かれたという文献史料も残されている。規模・形態・様式・残存状態・文献史料等から、猪垣の代表的物件であるといえ、加えて立地条件・保存管理体制等の面からも、地域の文化遺産として活用し、地域活性化に結びつける好条件を備えた存在となっている。



図2-7-29 石積み講習会の実施(万足平を考える会)

平成17年(2005)に「万足平を考える会」(中金町)が地元で立ち上がり、地域住民や学生・児童への石積み講習会を実施し、保存・普及を図っている。

現在も、猪垣に囲まれた田畑で耕作が行われている。山間地の急峻な山林の裾と耕地の境に整然と巡らされた石垣列は、耕作地を大切に守ってきた人々の意志が感じられる景観である。

(8)おわりに

額田地区は岡崎市東部山地の急峻な山林の間に営まれる山里を背景としており、山間部に通じる街道により、岡崎市街、豊川市、信州とも関わりながら特有の文化を育んできた地域である。近世の額田地区には52か所ほどの村々があり、幕府領、大名領、旗本領、寺社領が入り組み、複雑な支配を受けていた。また、それ以前は豪族の支配拠点を中心に形成された村や戦乱を避けて住み着いた人々の村が混在していた。これら住民の歴史的、経済的な成り立ちから、様々な組織が生まれて強い結びつきが形成され、こうした結びつきから、毎年、男川本流の井堰^{いせき}から通じる用水路から田へ井道を普請し、また、炭焼きや茶の栽培等の生業も続けられている。

このように額田地区には地域の紐帯^{ちゅうたい}の中心ともなる社寺や集落を舞台として、各地区の個性あふれる民俗行事と調和した景観が形成されており、山里の暮らしとそこに息づく伝承文化が織りなす歴史的風致がある。

¹ 社会を形づくる結びつき。

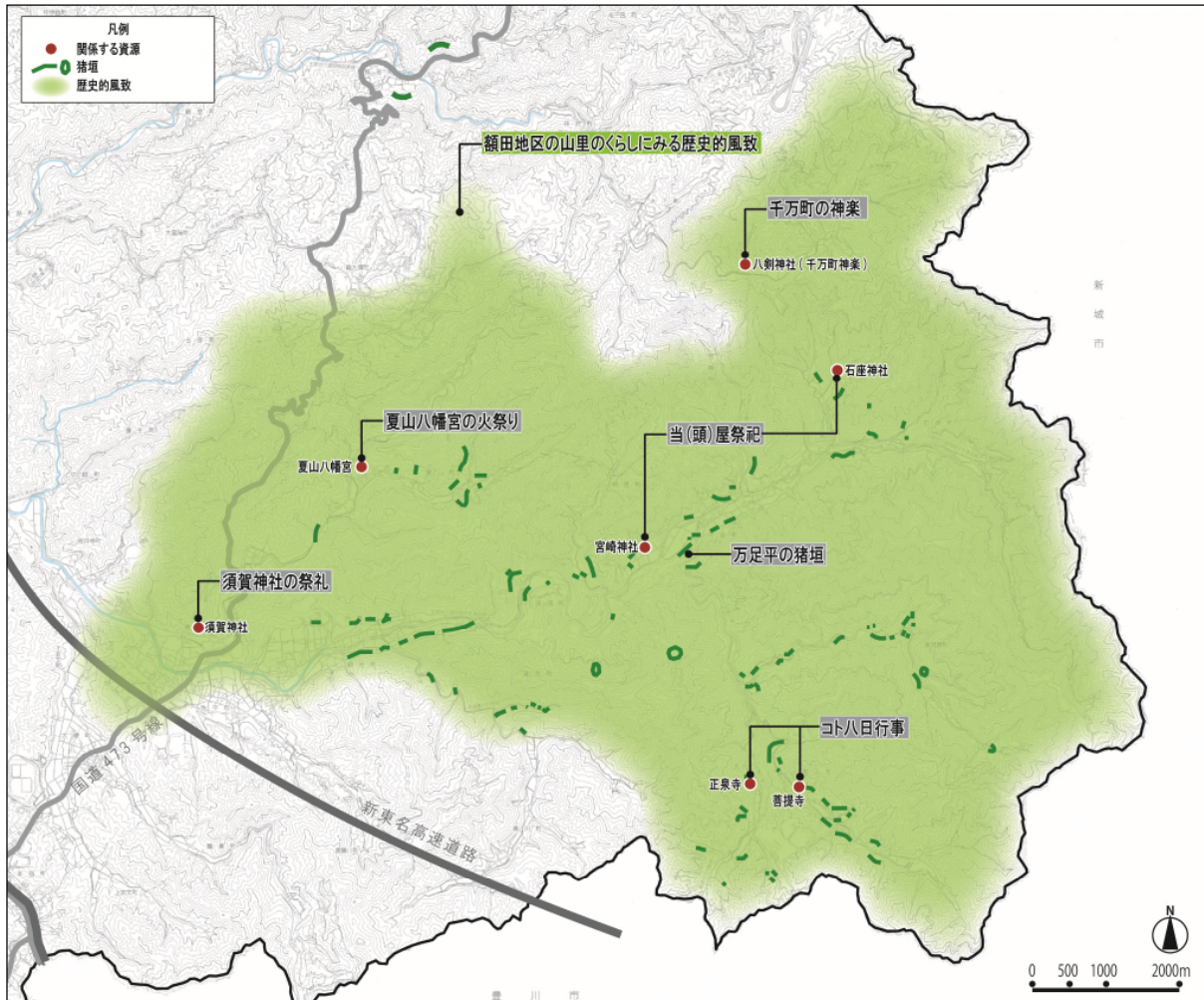


図2-7-30 額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致の範囲

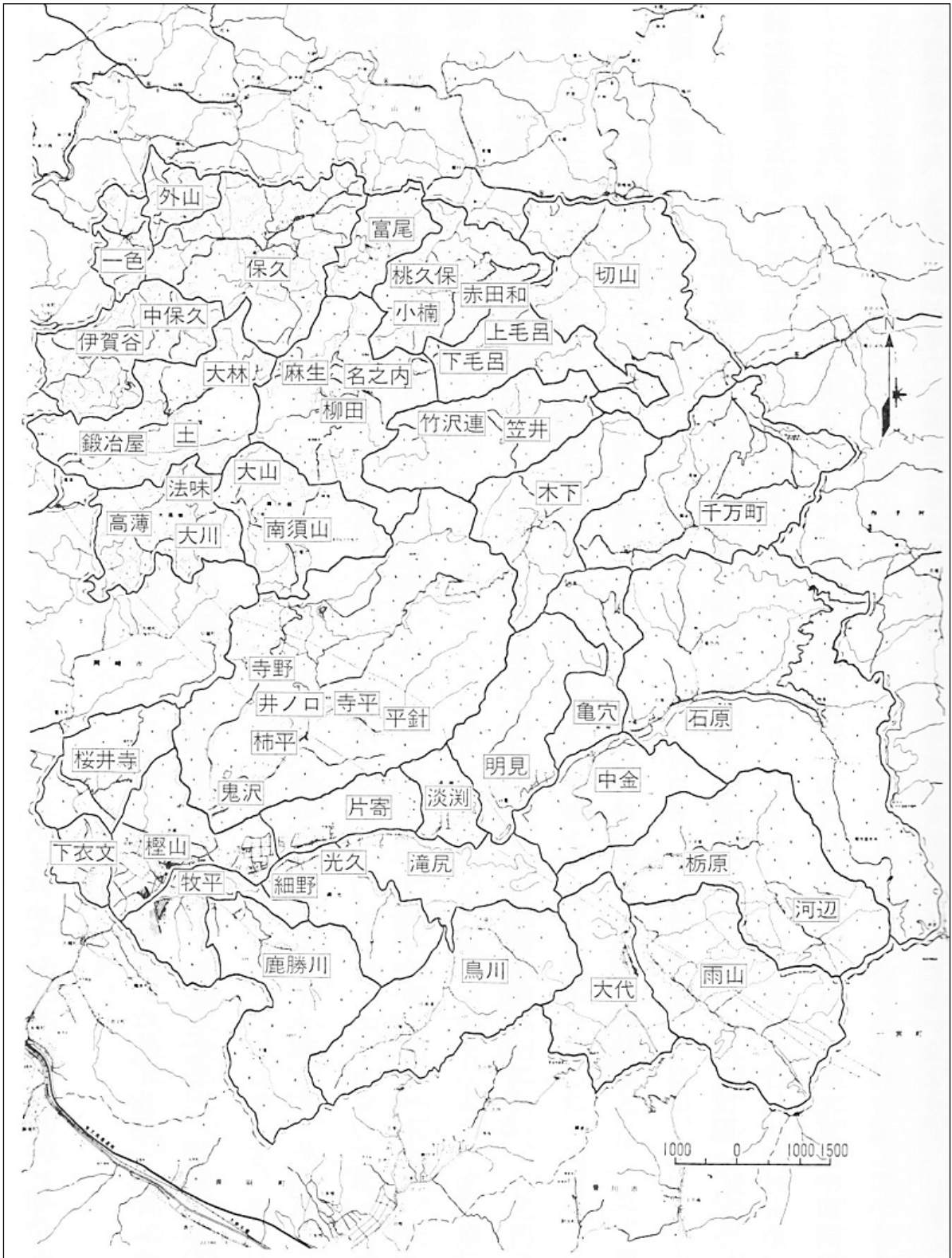


図2-7-31 額田の村々（現在も村名の多くが町名や字名に残っている。）